●この哲学から日本づくりを進めよう！

# 「感性論哲学」入門

●「この哲学から日本の復活がはじまる」
（著者　鈴木繁伸/芳村思風、株式会社マネジメントブレーン刊）
の上下巻の内容の構成を組み換えるとともに、ダイジェスト
させていただいたものです。

株式会社　エディックス　山本英夫

# はじめに

２００１年、２１世紀。いよいよ新しい千年紀の幕開けです。この歴史的大転換期に生まれ合わせた私たちにはそれなりの使命があります。それぞれの使命に目覚め、一隅を照らす者として命を輝かせることで新しい社会・新しい時代が拓けてきます。それでは私は何をすべきか。それは、それぞれが自分で見つけるものです。そのために授かった命と授かった時間です。限りある、たった一度の人生の中で、自らの為すべきことを見つけ、為すべきを為し、自己実現・自己創造・自己完成をしながら、子孫に残せる素晴らしい社会づくりを進めていくことができればと念じるものです。

そのような時代を興す原理が哲学であり、今学ぶべき哲学は「感性論哲学」というものです。これはそのほんの入口を示すプログラムです。

# も・く・じ

●はじめに
●もくじ
●第１部　感性論哲学の体系
・体系図１
・体系図２
●第２部　感性論哲学・概論
・感性論哲学とはどんな哲学か
●第３部　感性論哲学・本論
・感性論哲学の基本原理
・人生哲学の基本原理
・実現すべき自己の実現（意志）/愛の実力（愛）
・本物の人間とは何か
・人格論
・境涯論
・教育論/経営論
・成功への階段
●第４部　新しい社会
・脱近代化の理念と新しい価値観
・脱近代化の人間性
・感性論哲学の興亡の原理
●第５部　日本の使命
・２１世紀、日本の使命

当プログラムのベースは前掲の「この哲学から日本の復活が始まる」（鈴木繁伸・芳村思風共著）です。

第１部は、感性論哲学の全体構成について概観するとともに、私見の構成をご披露しています。その構成により当プログラムは展開しています。

第２部は、「感性論哲学とはどんな哲学か」を少し距離をおいた視点から述べています。

第３部は、本論であり、その基本原理から始まり、人生哲学の原理を明らかにした上で展開していきます。命の２大欲求である「自己保存欲求」と「種族保存欲求」から「意志」と「愛」を導き出し、そして人間論へ進み、その中核をなす人格論とその成長プロセスを説く境涯論へと展開されます。

さらに、それらが人間社会における「教育論」「経営論」に適用され、それによる人間における成功の在り方として総括されています。

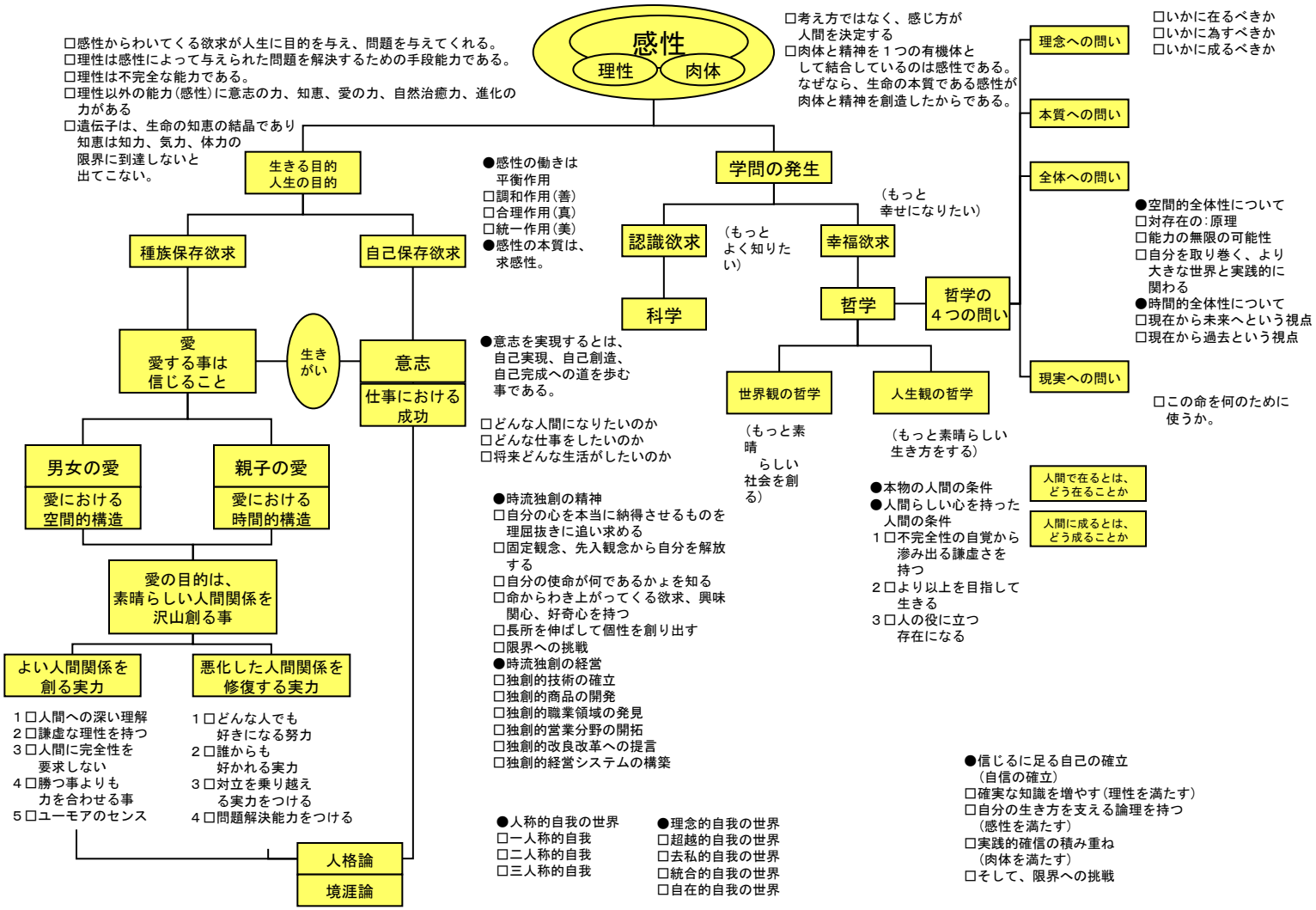
第４部は、主体である自己が働きかける客体・対象について明らかにしていきます。つまり、自分以外の人、家族であり、地域社会であり、国家であり、社会全体です。公と言っていいでしょう。

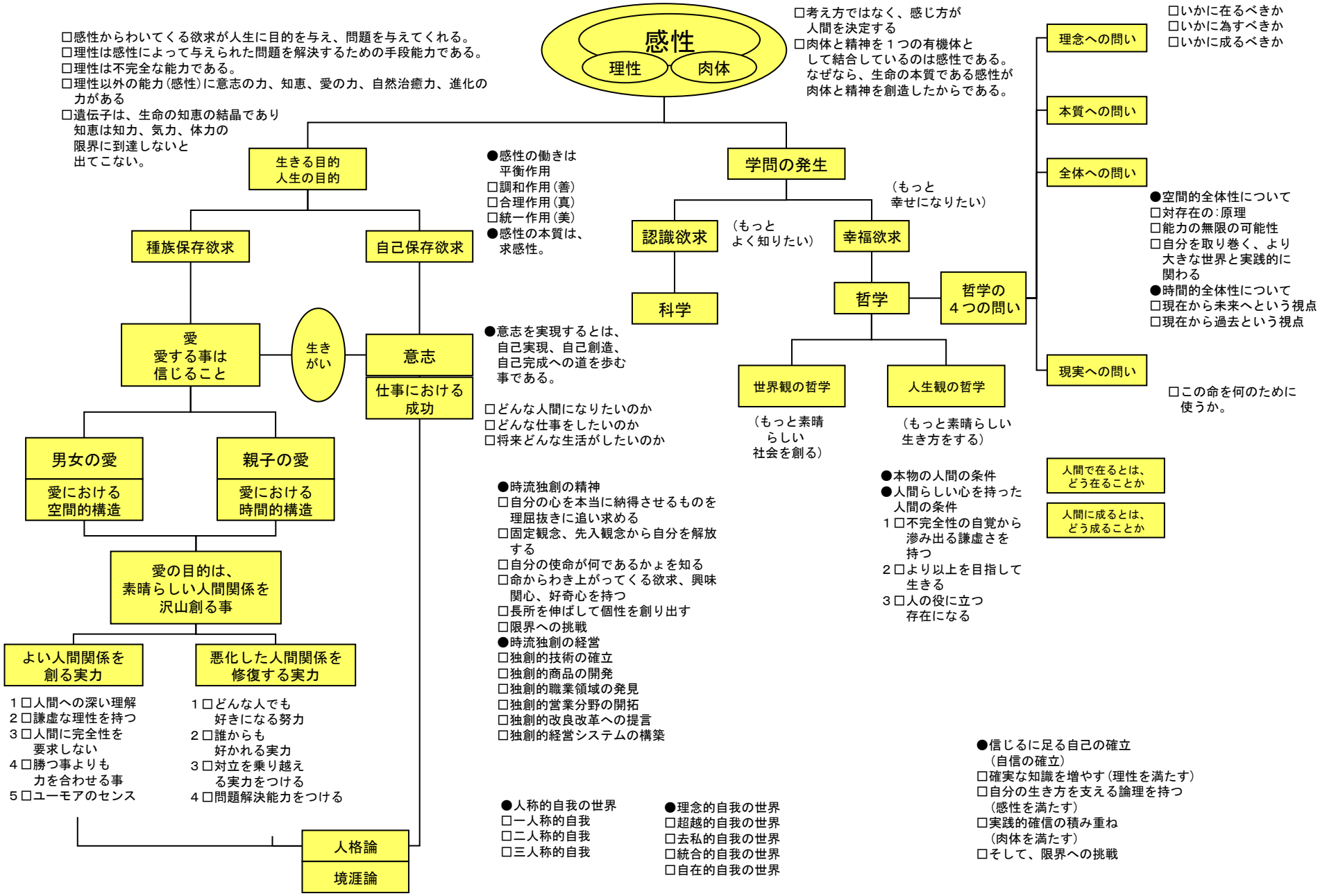
第５部は、私たちが生まれた国、
日本の持つ独自の使命について明らかにしています。

# 「感性論哲学」入門
# 第１部
# 感性論哲学の体系

●まず、基本テキストをベースにして全体の体系を整理してみました。
次に、山本英夫の私見で、再構成をしてみたものです。

# 1－1●「感性論哲学」の体系図１



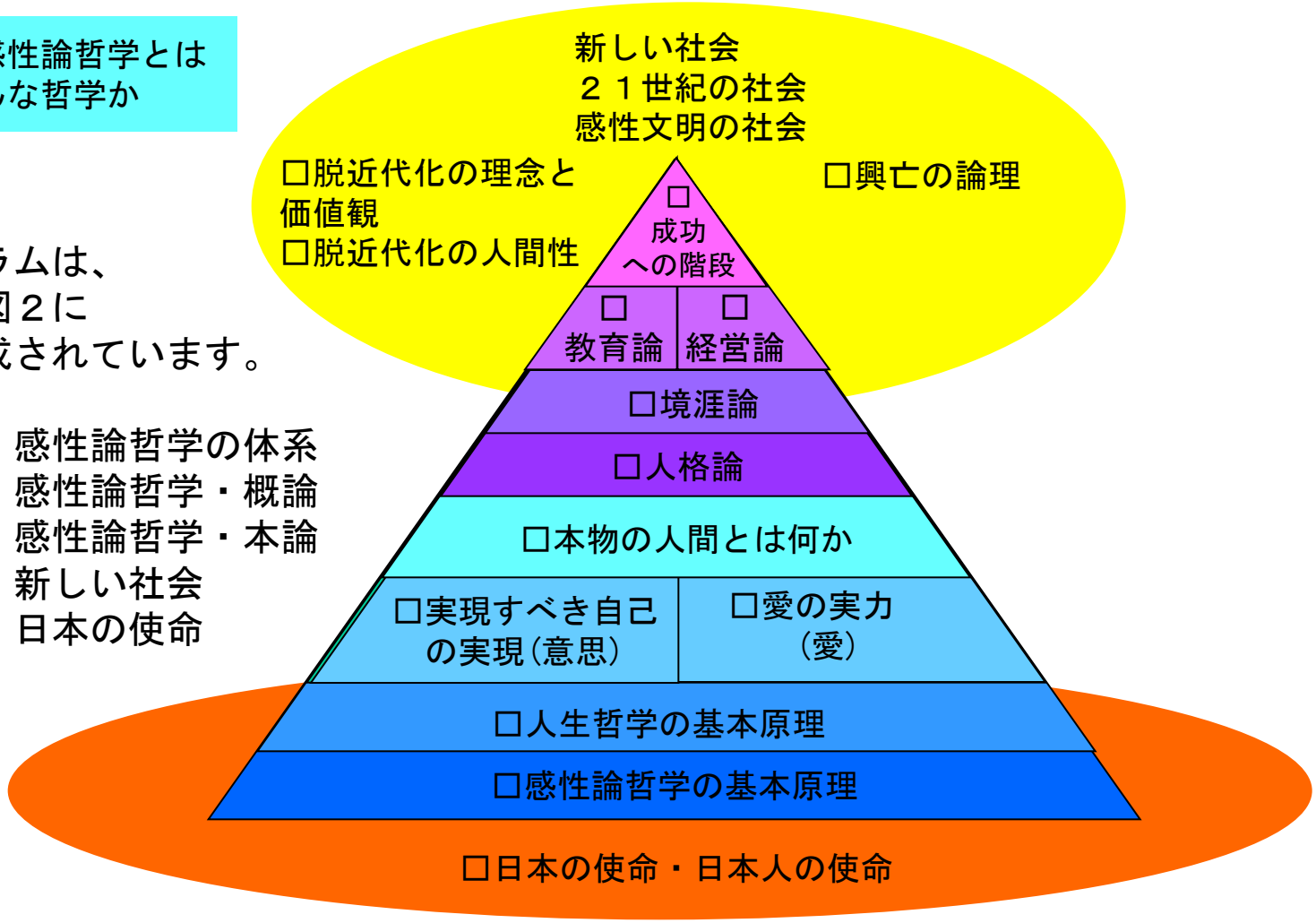

感性
理性
肉体
□考え方ではなく、感じ方が
人間を決定する
□肉体と精神を１つの有機体と
して結合しているのは感性である。
なぜなら、生命の本質である感性が
肉体と精神を創造したからである。
□感性からわいてくる欲求が人生に目的を与え、問題を与えてくれる。
□理性は感性によって与えられた問題を解決するための手段能力である。
□理性は不完全な能力である。
□理性以外の能力（感性）に意志の力、知恵、愛の力、自然治癒力、進化の
力がある
□遺伝子は、生命の知恵の結晶であり
知恵は知力、気力、体力の
限界に到達しないと
出てこない。
生きる目的
人生の目的
●感性の働きは
平衡作用
□調和作用（善）
□合理作用（真）
□統一作用（美）
●感性の本質は、
求感性。
学問の発生
（もっと
幸せになりたい）
認識欲求
（もっと
よく知りたい）
幸福欲求
科学
哲学
哲学の
４つの問い
理念への問い
□いかに在るべきか
□いかに為すべきか
□いかに成るべきか
本質への問い
全体への問い
●空間的全体性について
□対存在の：原理
□能力の無限の可能性
□自分を取り巻く、より
大きな世界と実践的に
関わる
●時間的全体性について
□現在から未来へという視点
□現在から過去という視点
現実への問い
□この命を何のために
使うか。
種族保存欲求
自己保存欲求
愛
愛する事は
信じること
生き
がい
意志
仕事における
成功
●意志を実現するとは、
自己実現、自己創造、
自己完成への道を歩む
事である。
□どんな人間になりたいのか
□どんな仕事をしたいのか
□将来どんな生活がしたいのか
世界観の哲学
（もっと素晴
らしい
社会を創る）
人生観の哲学
（もっと素晴らしい
生き方をする）
●本物の人間の条件
●人間らしい心を持った
人間の条件
１□不完全性の自覚から
滲み出る謙虚さを
持つ
２□より以上を目指して
生きる
３□人の役に立つ
存在になる
人間で在るとは、
どう在ることか
人間に成るとは、
どう成ることか
男女の愛
愛における
空間的構造
親子の愛
愛における
時間的構造
●時流独創の精神
□自分の心を本当に納得させるものを
理屈抜きに追い求める
□固定観念、先入観念から自分を解放
する
□自分の使命が何であるかょを知る
□命からわき上がってくる欲求、興味
関心、好奇心を持つ
□長所を伸ばして個性を創り出す
□限界への挑戦
●時流独創の経営
□独創的技術の確立
□独創的商品の開発
□独創的職業領域の発見
□独創的営業分野の開拓
□独創的改良改革への提言
□独創的経営システムの構築
愛の目的は、
素晴らしい人間関係を
沢山創る事
よい人間関係を
創る実力
１□人間への深い理解
２□謙虚な理性を持つ
３□人間に完全性を
要求しない
４□勝つ事よりも
力を合わせる事
５□ユーモアのセンス
悪化した人間関係を
修復する実力
１□どんな人でも
好きになる努力
２□誰からも
好かれる実力
３□対立を乗り越え
る実力をつける
４□問題解決能力をつける
●信じるに足る自己の確立
（自信の確立）
□確実な知識を増やす（理性を満たす）
□自分の生き方を支える論理を持つ
（感性を満たす）
□実践的確信の積み重ね
（肉体を満たす）
□そして、限界への挑戦
●人称的自我の世界
□一人称的自我
□二人称的自我
□三人称的自我
●理念的自我の世界
□超越的自我の世界
□去私的自我の世界
□統合的自我の世界
□自在的自我の世界
人格論
境涯論

# １－２●「感性論哲学」の体系図２

□感性論哲学とは
どんな哲学か

本プログラムは、
この体系図２に
則って構成されています。

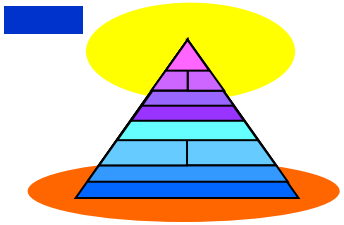
●第１部　感性論哲学の体系
●第２部　感性論哲学・概論
●第３部　感性論哲学・本論
●第４部　新しい社会
●第５部　日本の使命



# 「感性論哲学」入門
# 第２部
# 感性論哲学・概論

●第２部は、「感性論哲学とはどんな哲学か」を少し距離をおいた視点から述べています。

# ２－１●「感性論哲学」とはどんな哲学か１



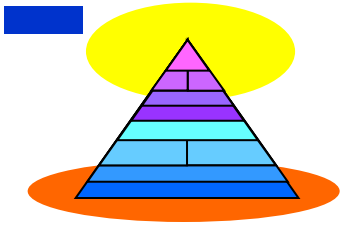
哲学は時代を興す原理である。
新時代を告げる歴史の胎動は、哲学的信念の確立と共に始まる。
現代に生き、未来を知らんとする者は、まず、新しき哲学の門を叩け。

人間は、常に、未来に生きる存在である。
未来は、如何に在るべきかという理念の世界である。

如何に在るべきか、如何に為すべきか、という理念は、
哲学的施策と論理によってしか与えられない。
科学は、ただ、事実を語り得るのみだからである。
真実は、心を満たすものであるから、
心において感じられ、把握されるものである。
しかし、それは、いまだ、形なき漠然としたものにすぎない。
その、心の中にうごめく形なき真実を論理の力によって鮮明にし、
人間の心を究極において満たすものが何なのかを
思想として表現せんとするものが、哲学である。
思想とは、論理によって自覚化された真実である。
そこで、人は、自らの心を本当に代弁してくれる思想を求め模索し、
遂には、自ら創り出さんととして努力するのである。

次ページに続く

# ２−２●「感性論哲学」とはどんな哲学か２



偏見をもった思想は、対立を生み出し、人類を不幸に陥れる。
哲学とは、真実を求める人間が、人類の運命をかけて、
論理を支えに、より正しい考え方を追究する、
果てしなき真実への求道なのである。

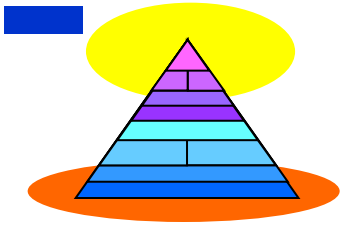
感性論哲学は、直観主義ではなく実感主義の哲学である。
方法論としては、発生学的解釈学の立場をとる。

感性論哲学は、なにものをも否定しない。
それ故に、感性論哲学は科学技術文明をも否定しない。
問題は、その上に如何なる文明を積み重ねていくかである。

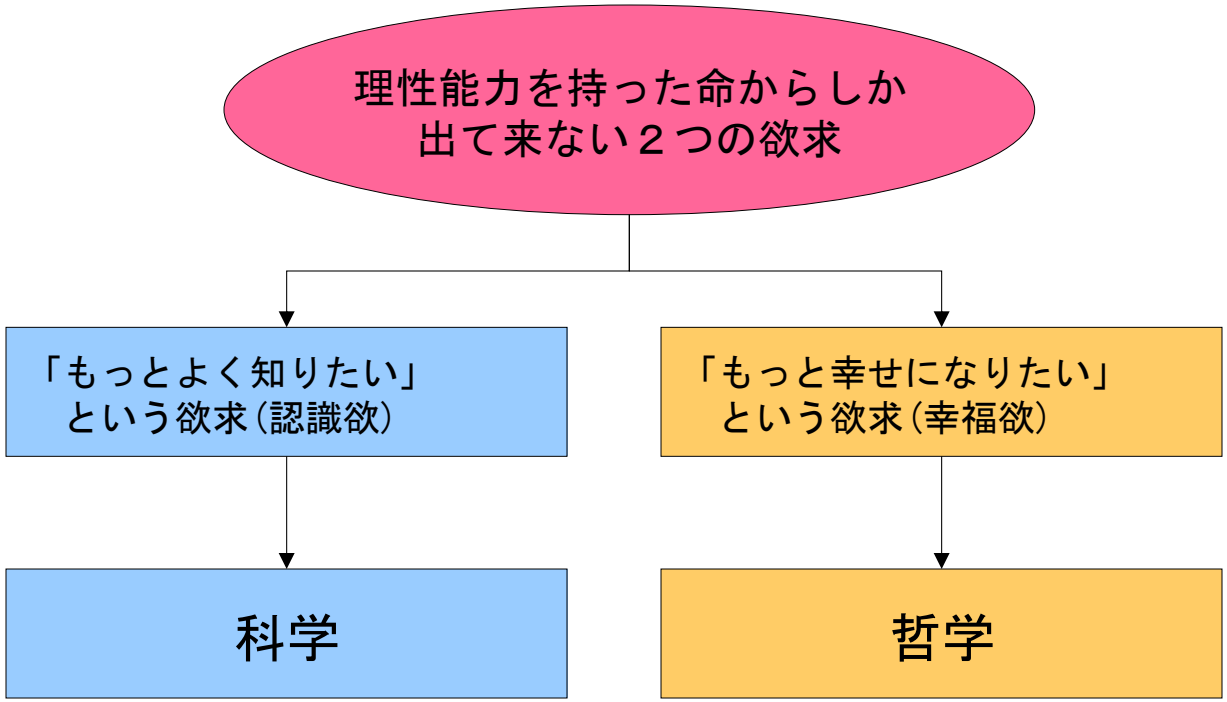
感性論哲学は、
人類普遍の実感、感動に内在する存在論的実質を原理として重視する。

思風

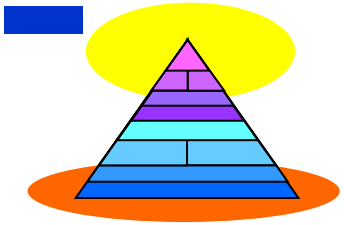
# ２－３●「感性論哲学」とはどんな哲学か３



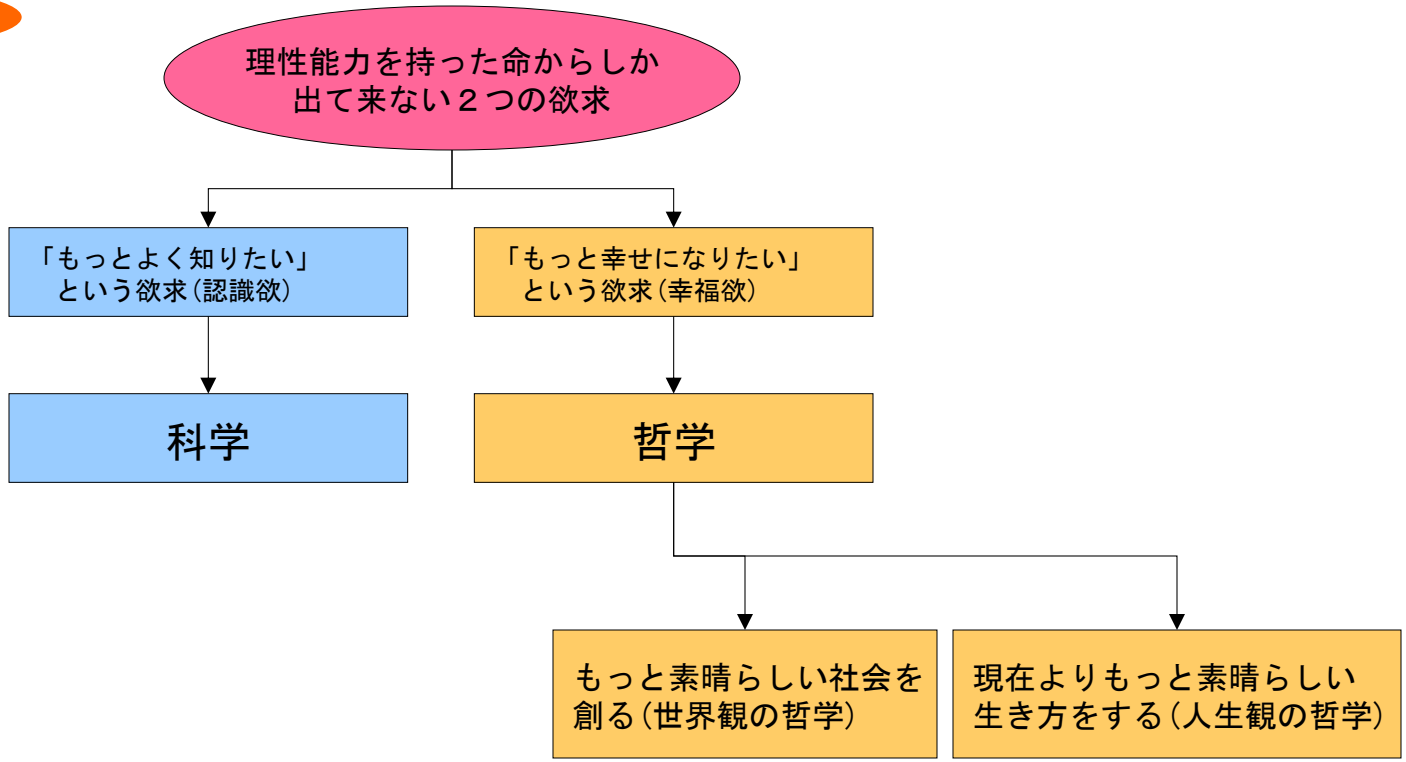
１）なぜ、哲学が生まれたのか



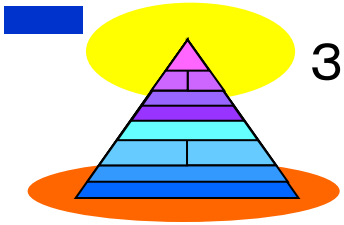
# ２－４●「感性論哲学」とはどんな哲学か４



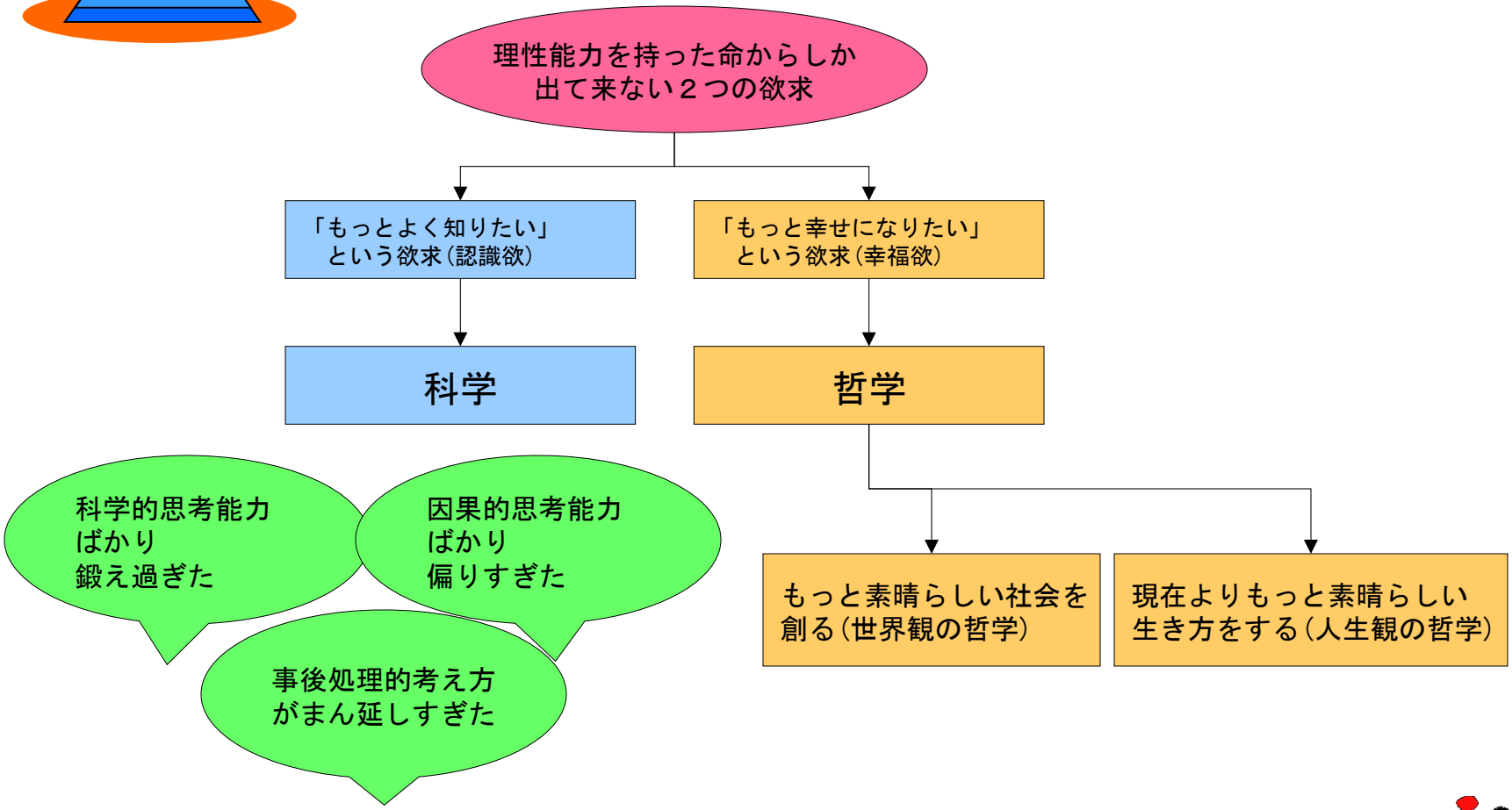
## ２）なぜ、誰にとっても（哲学が）必要であるのか



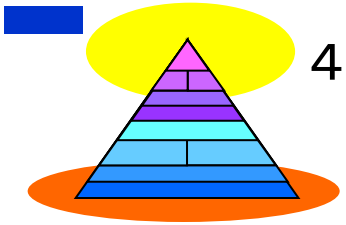
# ２－５●「感性論哲学」とはどんな哲学か５



３）不況の元凶は科学的思考能力である。哲学で人類は進化する。



# ２−６●「感性論哲学」とはどんな哲学か６



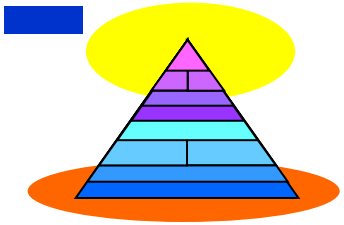
## ４）哲学とは何か。「哲学する」とはどういう事か

●哲学の本質
哲学の本質は、特定の哲学者の思想そのものにあるのではなく、「哲学的に考える」という現実的な思考作用そのものの中にこそ存在する、と言えます。

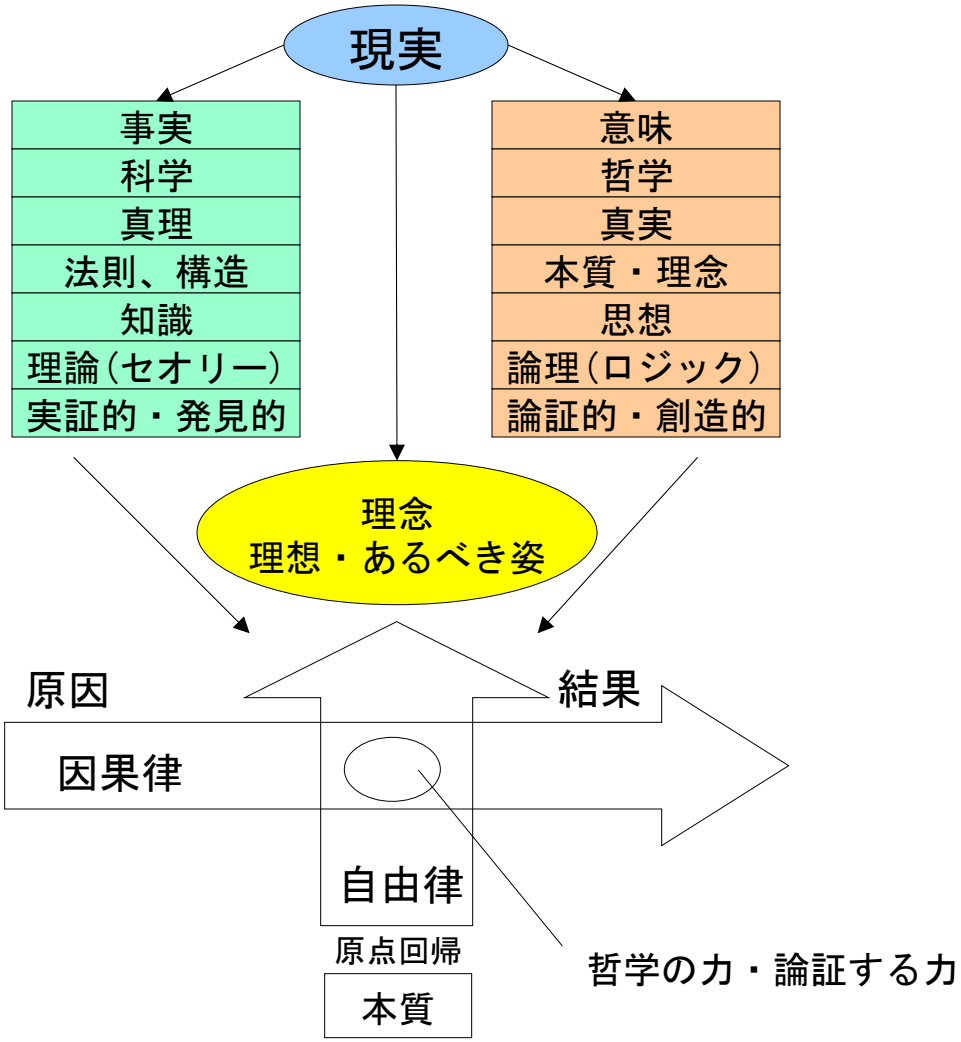
つまり、哲学とは、形成された在来の知識や前提に疑問を持ち、現実の考え方や思考を根本から支えている原理や前提に遡って、現実の知識や判断が本当に正しくて間違っていなかのかどうかを確かめ反省する事なのです。

●哲学の４つの問い
１口理念への問い（目標を未来に掲げる力）
２口本質への問い（原点思考・時流独創の精神づくり）
３口全体への問い（全体思考・全体と部分）
４口現実への問い（現実を理念へと変化させる力、批評精神、現実への異和感）

# ２－７●「感性論哲学」とはどんな哲学か７



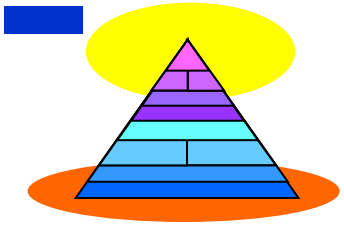
●哲学とは、
因果律のしがらみを
断ち切る自由の刀剣
である



# 「感性論哲学」入門
# 第３部
# 感性論哲学・本論

●第３部は、本論であり、その基本原理から始まり、人生哲学の原理を明らかにした上で展開していきます。命の２大欲求である「自己保存欲求」と「種族保存欲求」から「意志」と「愛」を導き出し、そして人間論へ進み、その中核をなす人格論とその成長プロセスを説く境涯論へと展開されます。さらに、それらが人間社会における「教育論」「経営論」に適用され、それによる人間における成功の在り方として総括されています。

# ３－１●「感性論哲学」の基本原理１



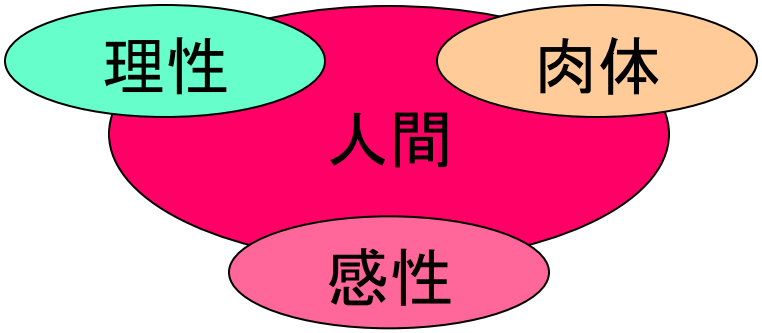
考え方ではなく、感じ方が人間を決定する。

肉体と精神を一つの有機体として結合しているのは
感性である。
なぜなら
生命の本質である感性が
肉体と精神を創造したからである。

思風

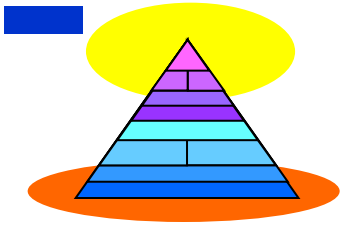
●一元論的人間観

●私という意識の根拠は感性
- 肉体は「私」という意識の根拠ではない
- 理性は「私」という意識の根拠ではない
- 「私」という意識の根拠は感性である




●すべては感性から始まる
- 感性が肉体をつくった
- 感性が五官をつくった
- 感性が理性をつくった

# ３－２●「感性論哲学」の基本原理２

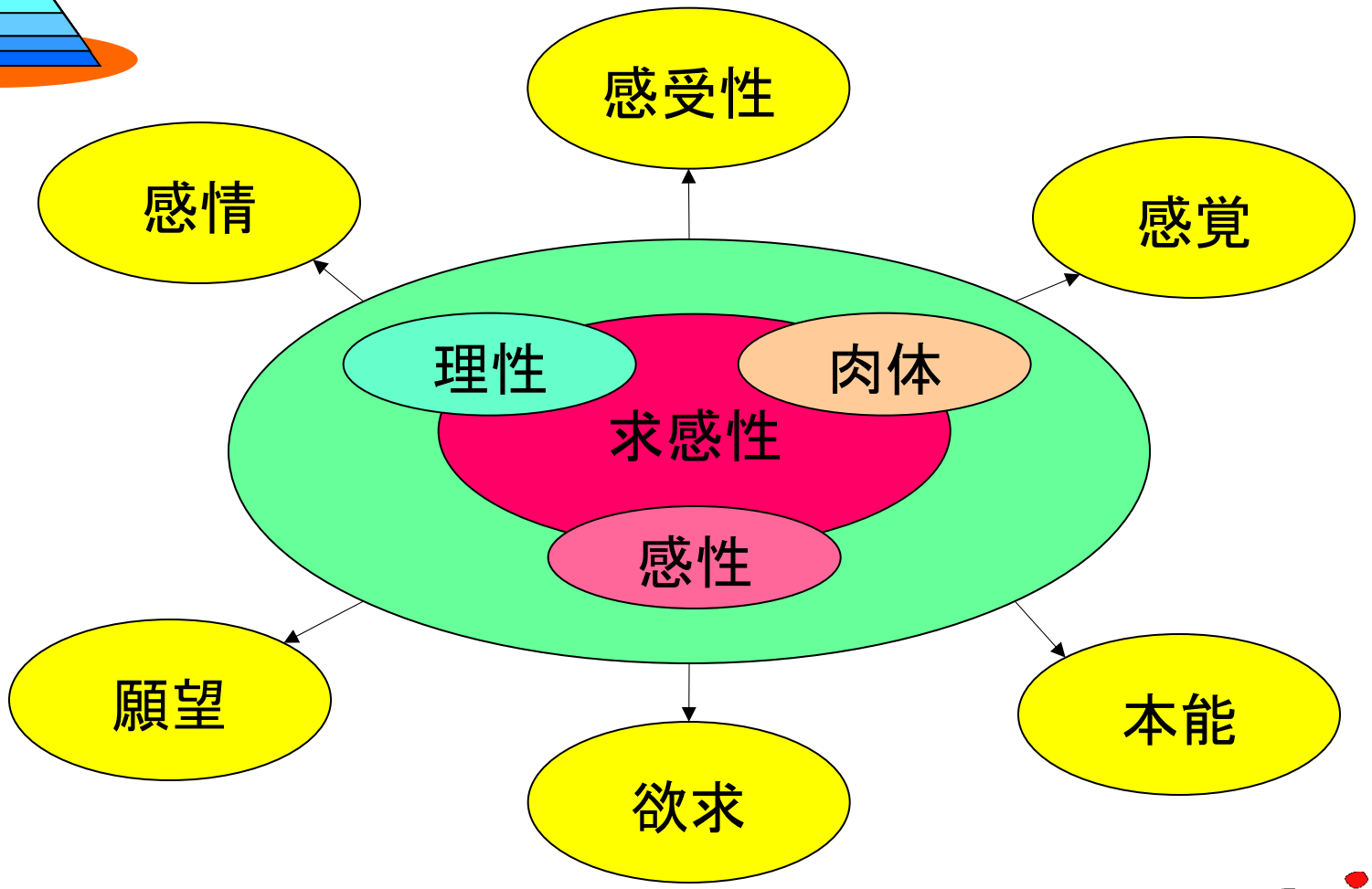


●感性の働きは平衡作用（ホメオスタシス、カオス）。
その体系と真・善・美の関係図
●感性の本質は求感性

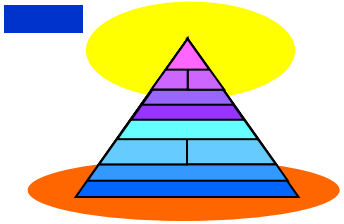
| 平衡作用（３作用） | 各作用の意識 | 内容 | ３作用が現象として総合的に現れたもの |
|---|---|---|---|
| 調和作用 | 真 | 人間関係や<br>環境との調和<br>新陳代謝 | 仕事における<br>「カン」「コツ」。<br>自然治癒力。<br>良心・人格など。 |
| 合理作用 | 善 | 目的を実現する<br>ための最適の方法を<br>模索する働き | |
| 統一作用 | 美 | 全体を一個の命として<br>まとめ上げる。<br>変化の中で統一した状態<br>を求める。 | |

# ３－３●「感性論哲学」の基本原理３

●感性そのものと現象として感性



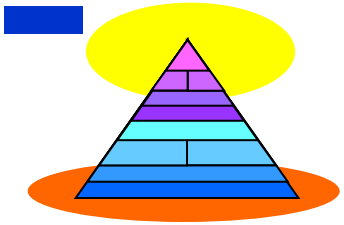
# ４●人生哲学の基本原理１



人生は意志と愛のドラマである。
人間は皆、愛ゆえに生き、愛のために死ぬのである。
意志ゆえに生き、意志の為に死ぬのである。
意志と愛の統合が人間であり、人生である。
愛の世界は、親子の愛を縦軸とし、男女の愛を横軸として、
その骨格が形成されている。
意志の世界は、自我（人類の意志）を縦軸とし、
職業（社会的使命）を横軸として、
その骨格は成り立っている。
この意志と愛を共に実現する事が、人生の目的である。
そして、人間生命の本質である意志と愛を、
努力しそて実現せんとする所に、
生き甲斐もまた生まれるのである。

思風

# ４●人生哲学の基本原理２



●「この命を何のために使うか?」という問いを持つ１

人間は、自覚し認識できる理性能力を持っています。だから、人間的な生き方の基本は、自覚的に生きるところにあります。それ故、人間は命を何の為に使い、何の為に死ぬのかという事を考える必要があるのです。

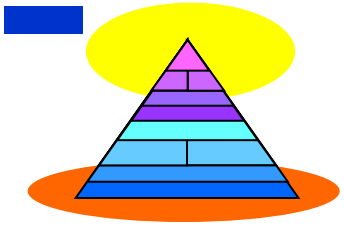
では、どうしてこの命を何の為に使うのかを考える必要があるのでしょうか。我々の命は何十年か前に生まれたものですが、我々の個体的な肉体の中で活動している命は、既にこの地球上で４０億年の時を刻んでおり、生命年齢は４０億歳なのです。

そういった生命の流れの中で、我々は、今その命を身体の中に宿して、何十年という時間を生きようとしています。この命の中では感性が生命の本質として働き、その感性によって、生命はよりよく生きるという生き方を求め続けています。よりよく生きるという生き方を通して、生命はこの地球上において進化してきました。

生命そのものがよりよく生きるという在り方において存在するから、我々はそれを自覚して、自分の人生をよりよく生きる、という生き方を何らかの形で表現し、模索しなければならないのです。

ここに、人生を自覚的に生きなければならないという基本原理があるのです。

# ４●人生哲学の基本原理３

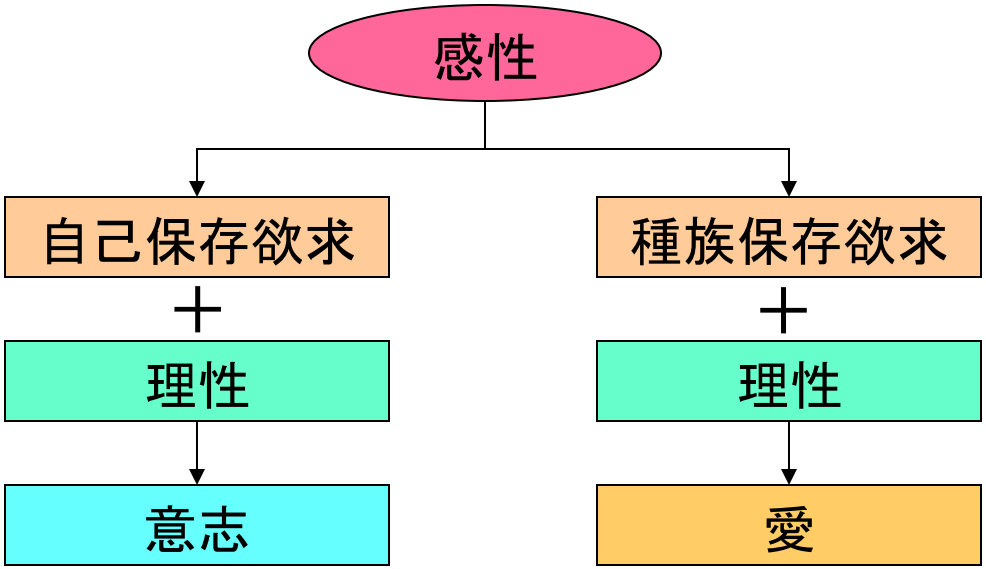


●「この命を何のために使うか?」という問いを持つ２

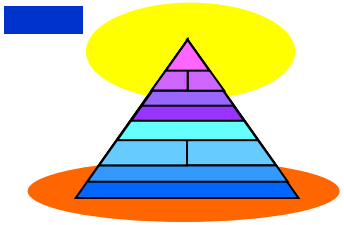
結局、人間とは「死への時間を生きるという存在です。これはハイデガーの有名な言葉ですが、人間は時間的な存在なのです。死を自覚しながら、その間に何をしようか、どういう生き方をしようかという事を自覚的に考えていく所に人間的な生き方の基本があります。

そこから、この命を何の為に使うか、という事が出てくるのです。

●人生は意志と愛のドラマである

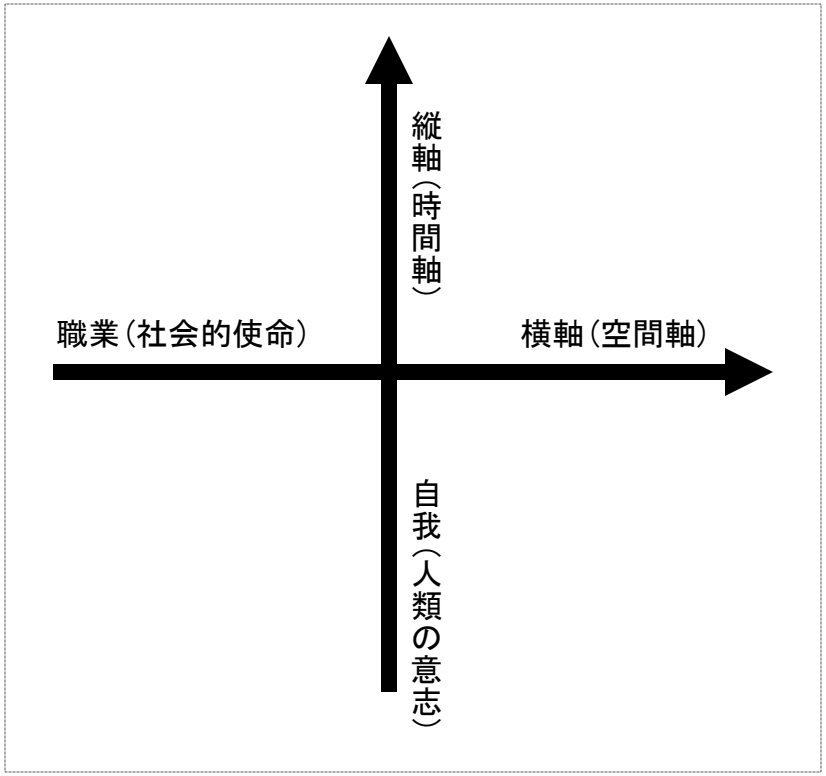


# ４●人生哲学の基本原理４

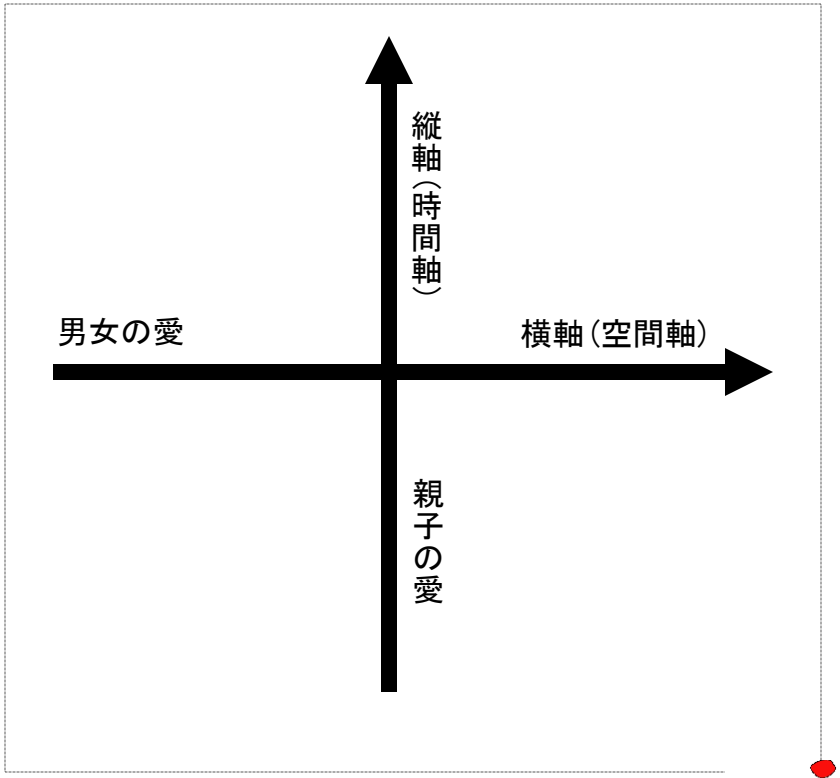


●人生の目的は、「意志」と「愛」の２つしかない

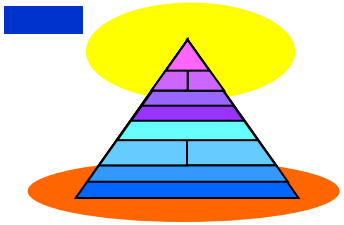
●意志の世界




●愛の世界



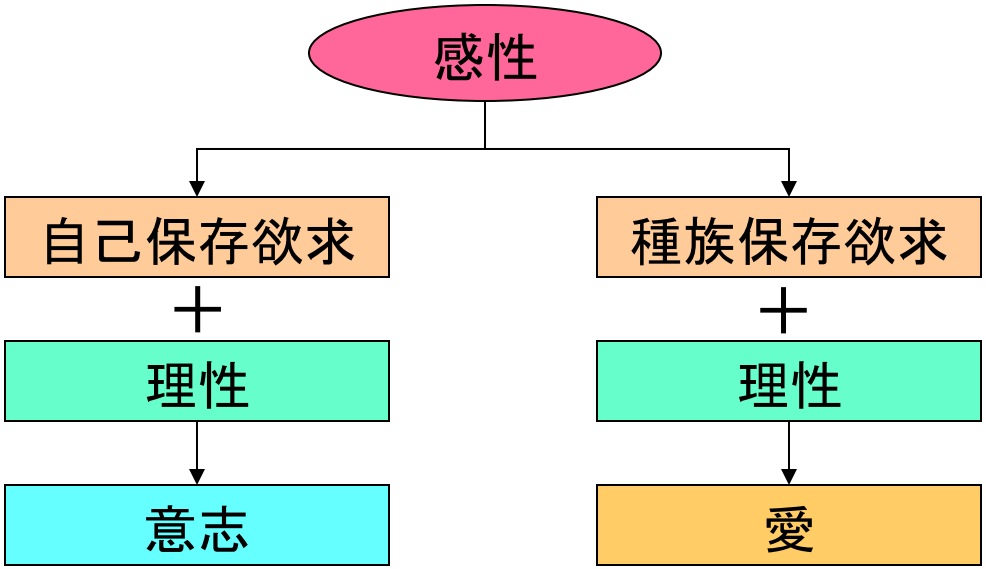
# ４●人生哲学の基本原理５（人生は意志と愛のドラマ）



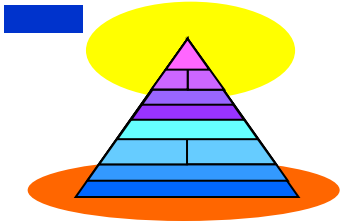
●人生は意志と愛のドラマである

　自分が生きるという事は、家族を養っていくために仕事をする事だと言ってもいい。命は単に生きているのではなく、目的があるのだという事です。その目的を実現するために、命は生きているのです。

　個体的生命は、せいぜい１００年の命ですが、生命そのものは永遠です。その永遠の生命の流れの中で、個体的生命は、生まれてから死ぬまでの間に、自分らしく生きるために努力するという自己保存と、種を守り家族を守る努力をするという種族保存とによって、永遠の命に寄与するという目的に参画し、自らの役割を果たしているのです。

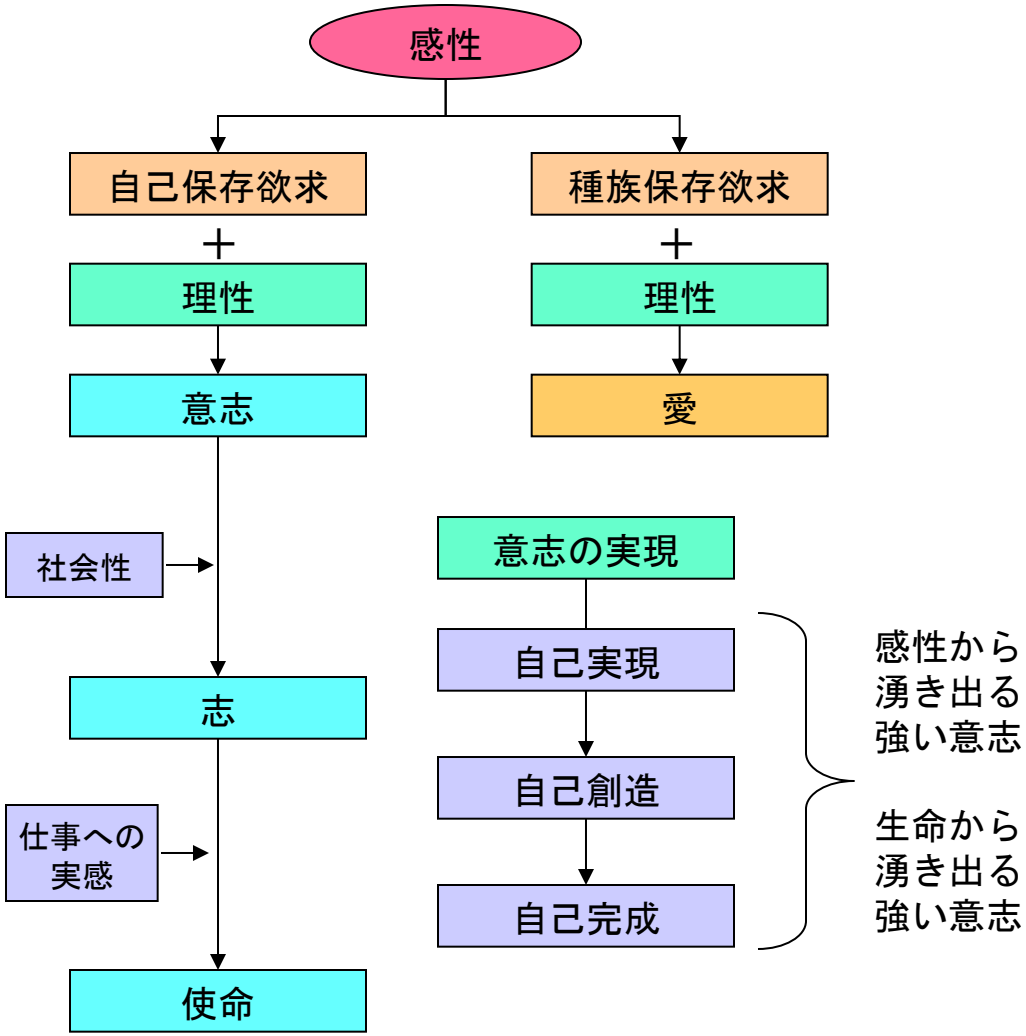


# ４●人生哲学の基本原理６（意志）

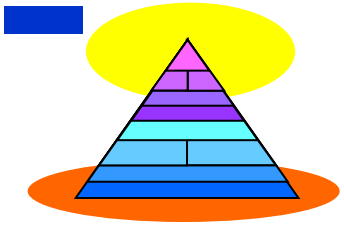


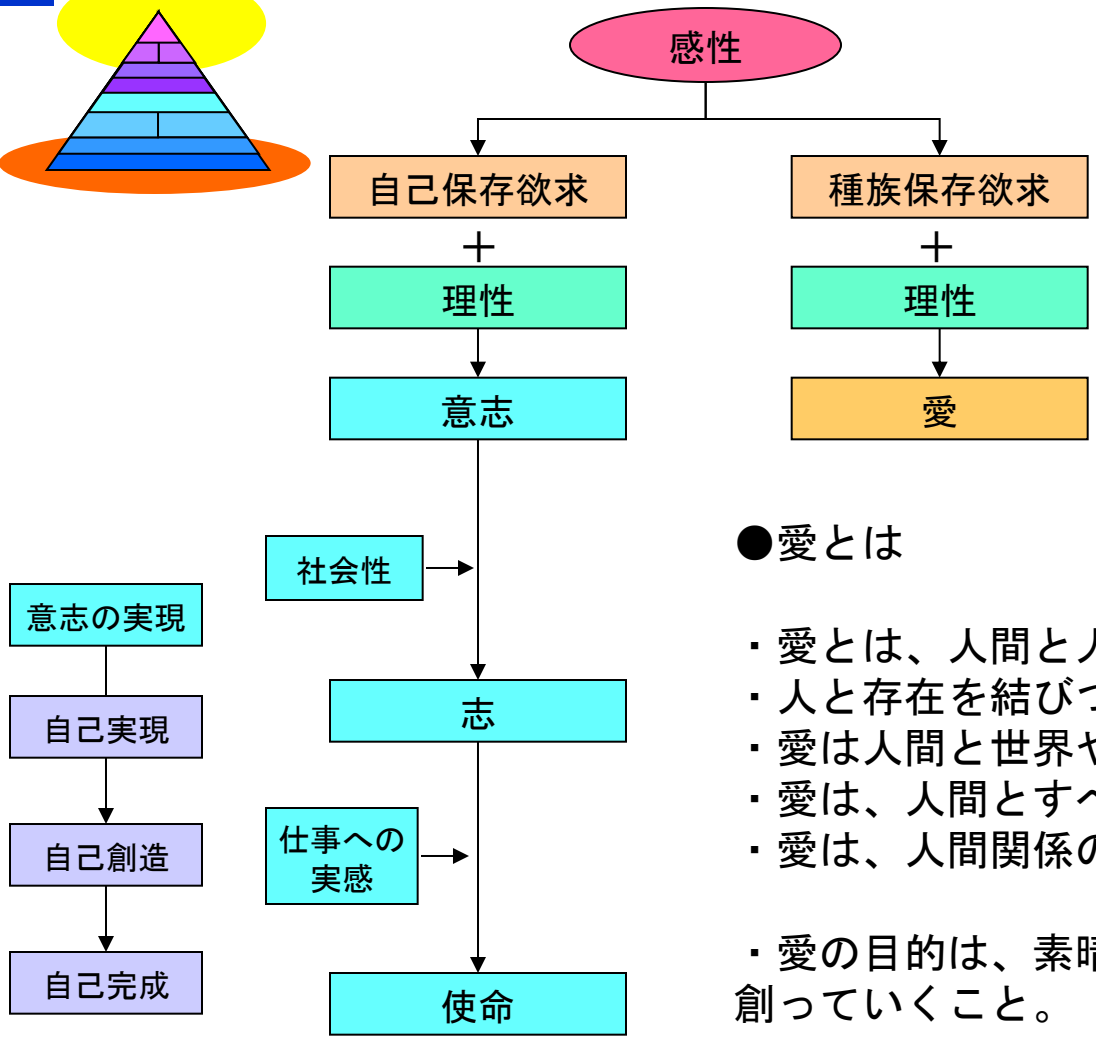
●意志から志へ
　理性を使って、どうしたら他人に迷惑をかけずに人の役に立つ方法で欲求を実現できるだろうか、と考える！社会性が意志に加わる事によって、意志から成長して志になるのです。

●志から使命へ
　自分は正にこの仕事をするために生まれてきたのだという実感が必要になってきます。



# ４●人生哲学の基本原理７（愛）



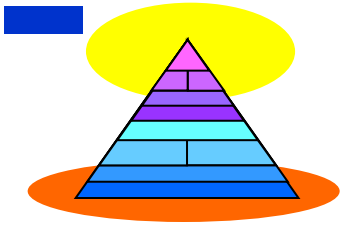


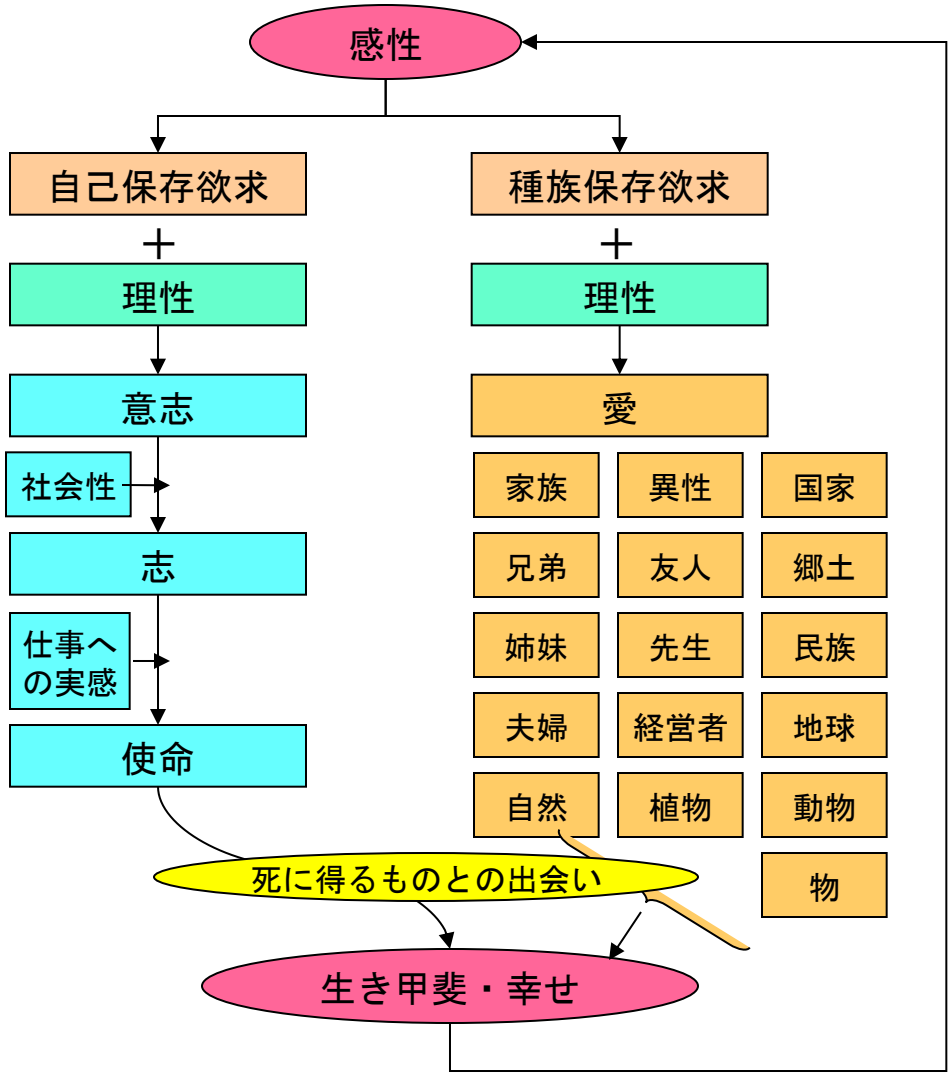

●愛とは

・愛とは、人間と人間を結びつける力。
・人と存在を結びつける力。
・愛は人間と世界やを宇宙を結びつける力。
・愛は、人間とすべてを結合する力。
・愛は、人間関係の力。

・愛の目的は、素晴らしい人間関係をたくさん創っていくこと。

# ４●人生哲学の基本原理８（生き甲斐・幸せ）

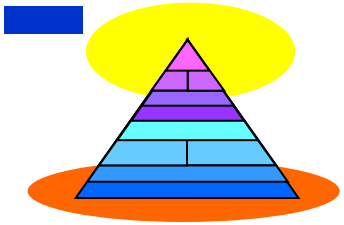


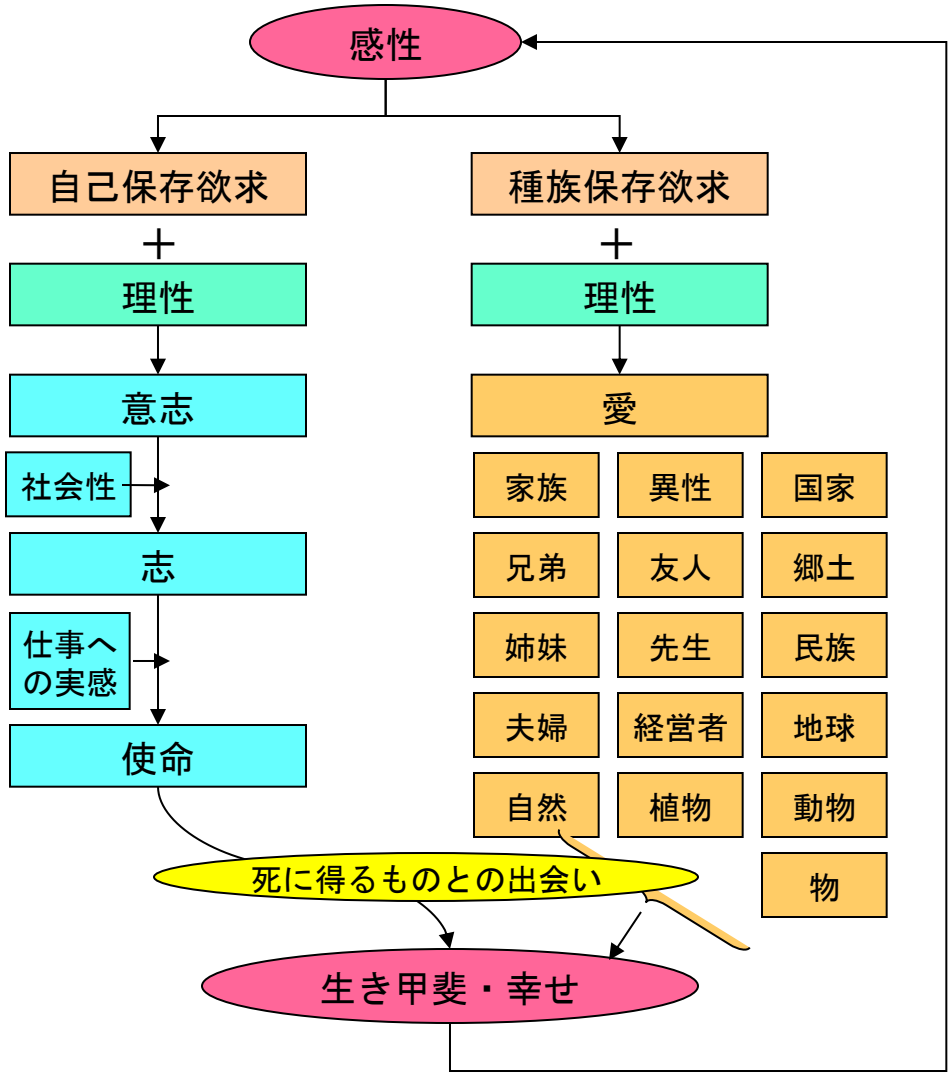



人生において本当に生き甲斐を感じ、充実感を求めるならば、人間は誰でも皆「心から愛することができるものと、人生を賭けて意志するものを持たねばならない。

命は、この為になら死んでもいいと思えるものと出会った時、最も活かされ、そこにこそ、生きるという事の最高の姿があるのです。

# ４●人生哲学の基本原理９（命を燃やす生き方）





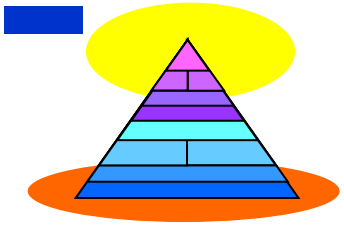

●命を燃やす生き方とは

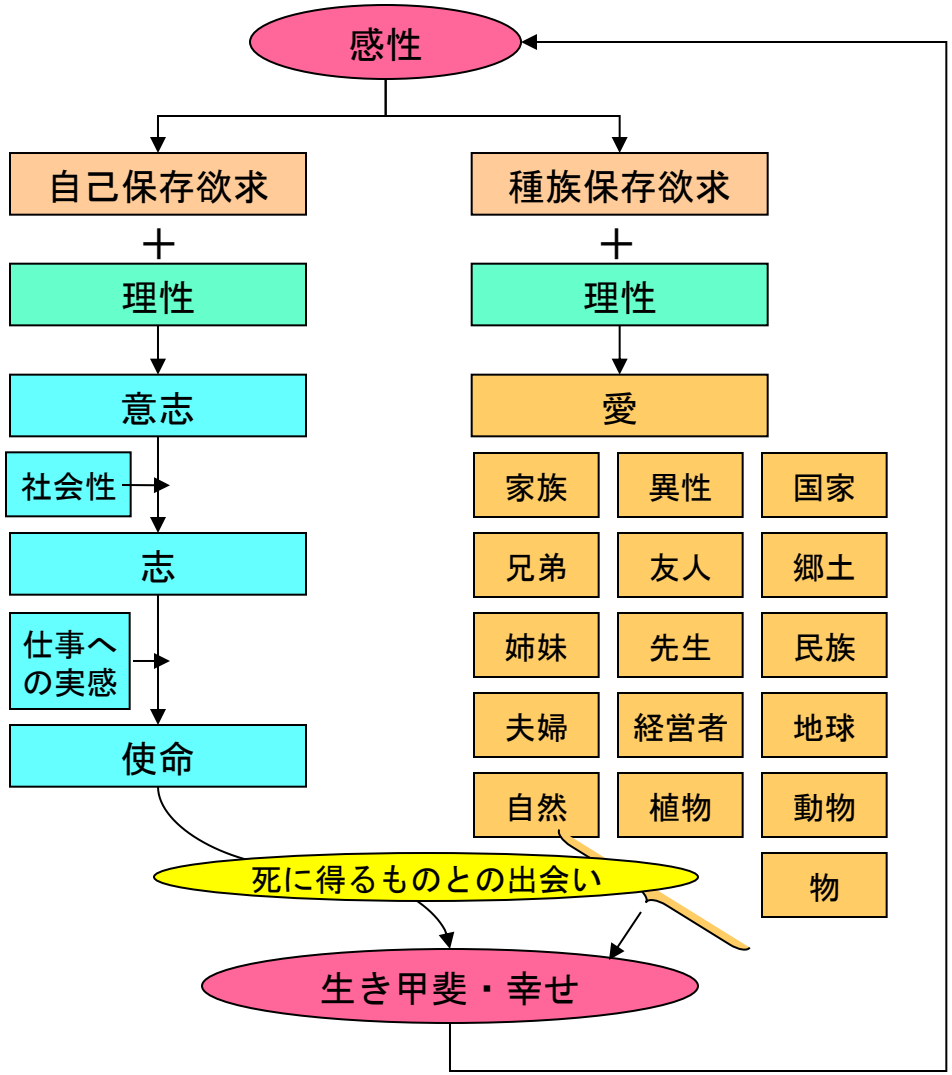
自分のやっている仕事の質を高め、進歩させ、向上させ、発展させる、という仕事全体の成長に自分が関わるような意識で仕事をすることが必要です。それによって、生き甲斐が生まれ、その為になら死んでもいいという価値が感じられたり、実感が湧いてきます。

よりよいものもを求めずに、ただ漫然と与えられた仕事をしている生き方の中には、生き甲斐もないのです。

義務と責任感という理性的な仕事の仕方には、燃える事ができないのです。

# ４●人生哲学の基本原理１０（命を燃やす生き方）



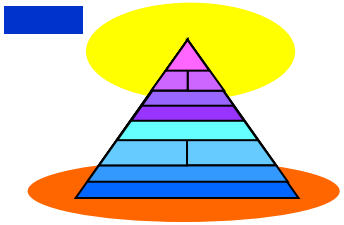


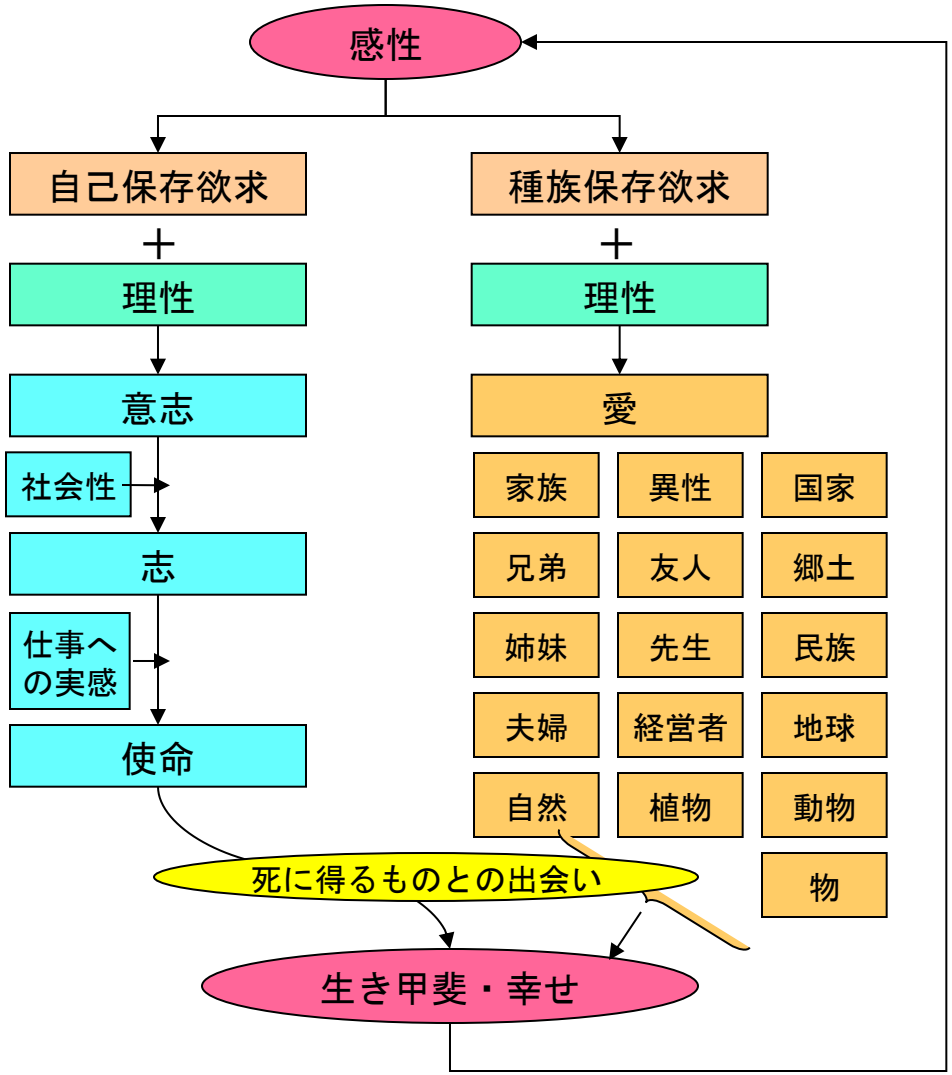

●意志と愛のバランスと統合

人生は、意志と愛の２つの原理によって成立しており、意志なき愛は、人間を堕落させます。愛なき意志は、人を傷つけることなしにはその目的を実現し得ません。

どんな仕事をする場合でも、どんな風に人間に対応する場合でも、意志と愛の２つの原理のバランスを考えていく必要があるのです。

# ４●人生哲学の基本原理１１（死に得るものとの出会い）



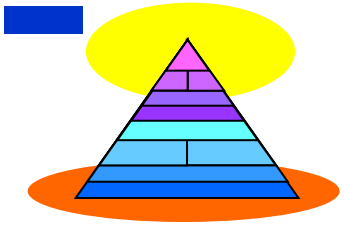


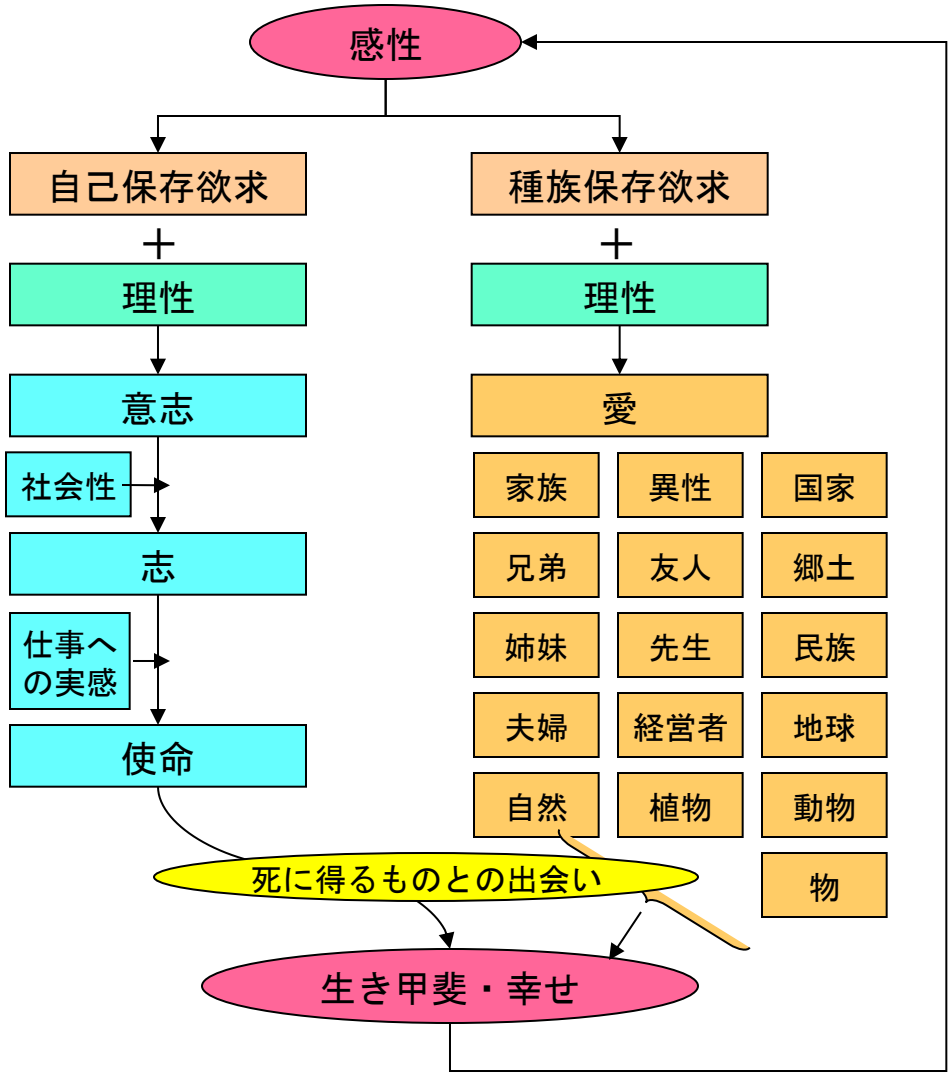

●死に得るものとの出会い１

　現在自分に与えられている職業や人間関係は、偶然ではなく、大宇宙の必然によって自分に与えられたものです。
　ですから、今自分に与えられている仕事や人間関係に全力投球する以外に、自分の人生の先は拓けない、という事なのです。

　今自分に与えられている仕事の中に、死んでもいいと思えるような価値を見い出していこう、今の仕事を人が羨むような、死んでもいいと思えるような仕事にしていこう、という創造的努力をする事によってしか、死に得るものとの出会いはありません。

# ４●人生哲学の基本原理１２（死に得るものとの出会い）



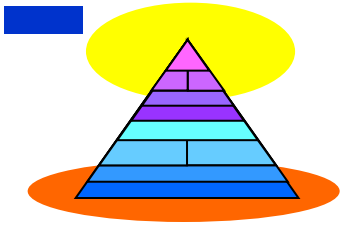



●死に得るものとの出会い２

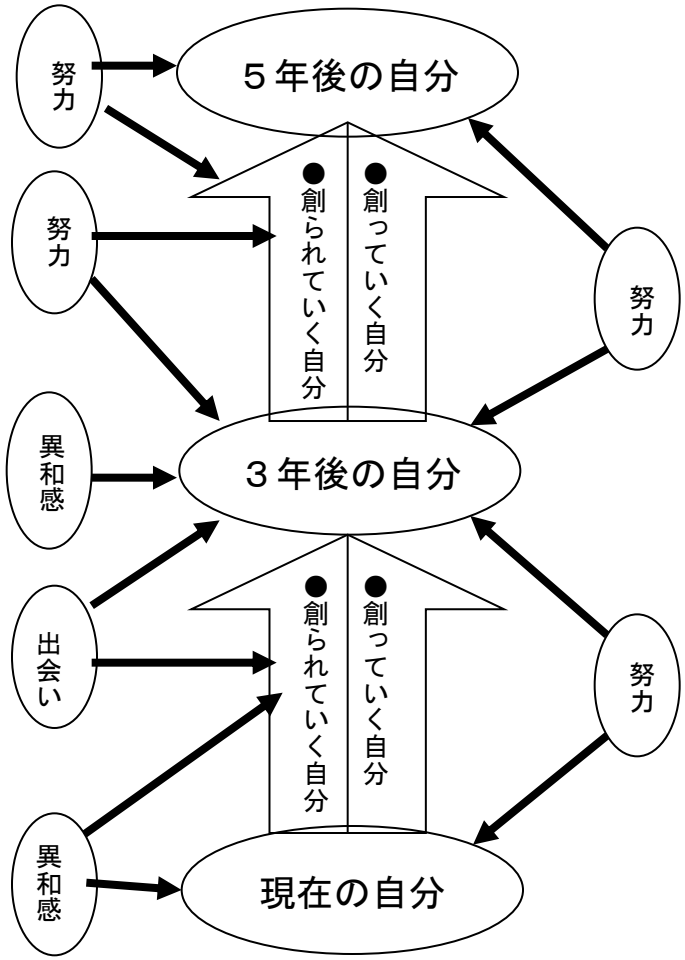
人間関係においても、今自分に与えられている人間関係をもっと素晴らしいものに充実させていく事を通してしか、素晴らしい人間関係の輪を広げていく事はできません。

今自分に与えられた人間関係を粗末にしていては、真に愛に値するものとは出会えません。今自分に与えられているものに真剣に関わる事によってしか、真実とは出会えないのです。誠実な生き方を通してしか真実は見出せません。

# ５－１●実現すべき自己の実現（意志）１

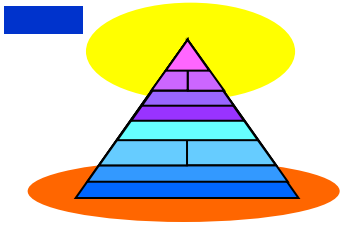


●実現すべき自己は変化し成長していく自己である。




変化し成長していく自己は
理性ではつかめない。
感性と直観でつかむ。

# ５－１●実現すべき自己の実現（意志）２



●成長する自分は３つに分類され、自己実現に向かう

**●創っていく自分**
１口どんな人間になりたいのか
２口どんな仕事がしたいのか
３口将来どんな生活がしたいのか

１口消去法
２口趣味・得意分野を伸ばす法
３口今の仕事を真剣にする
（潜在能力の顕現）

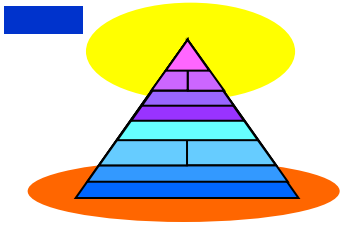
**●創られていく自分**
出会い（先生、親、本、映画、友人、夫、妻等）によって形成される。
１口性格→そのままを受け容れる
２口長所→伸ばす
３口短所→意識はしていること

**●現在の自分**
現実への異和感を使命とする。

※「現実への異和感の構造」参照

**自己実現**

# ５－１●実現すべき自己の実現（意志）３

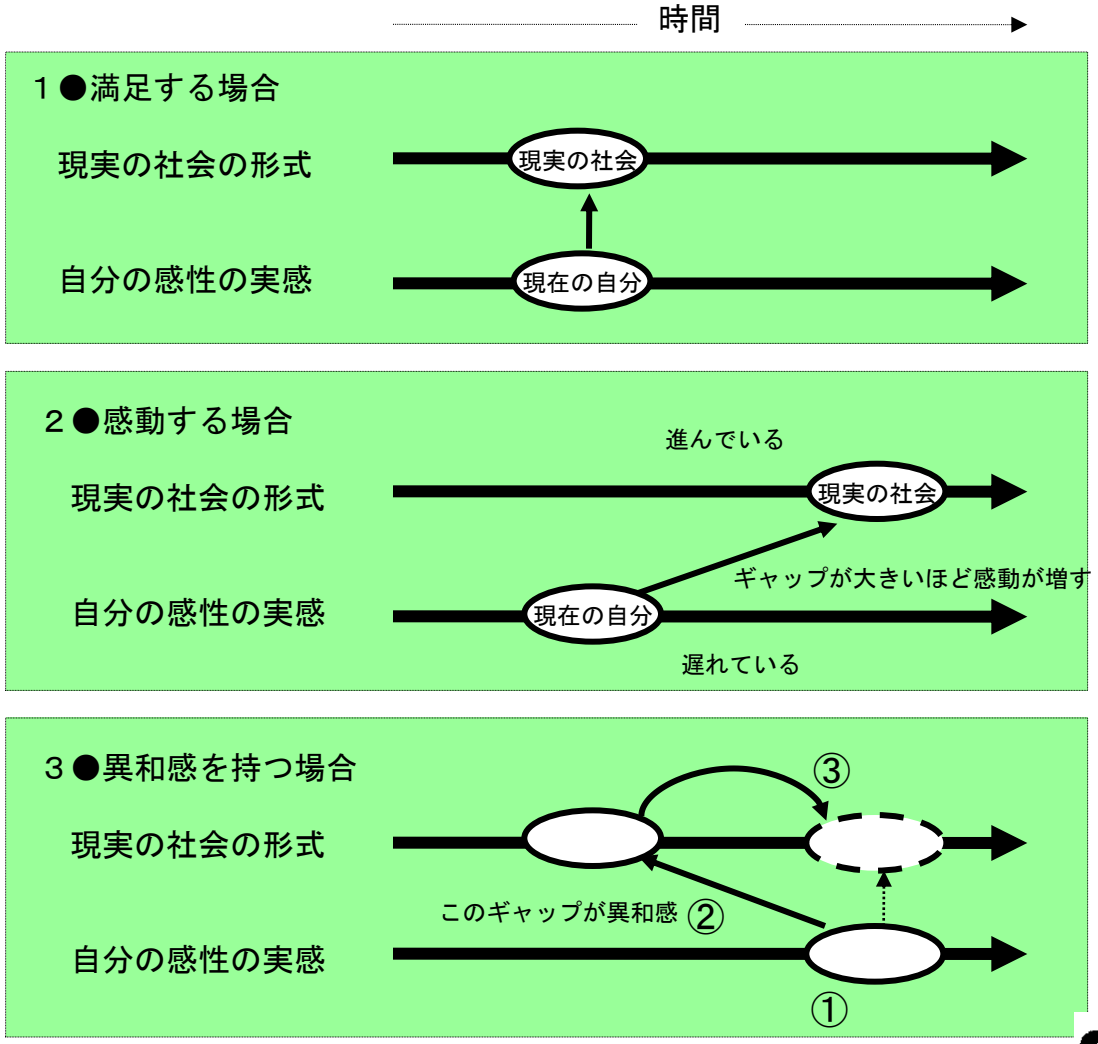


①現実に深く関わり、真剣な生き方をすると、形式と実感の位置がはっきりわかる。

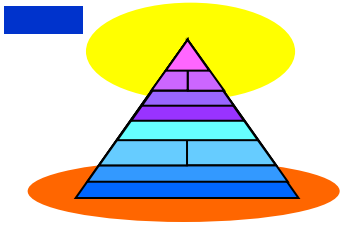
②この「ズレ」は天啓の一瞬であり、自分に与えられた歴史的指名を教えてくれる。

③納得できる所まで現実を変えていく潜在能力の存在の証明である。

## ●現実への異和感の構造



# ５－２●愛の実力（愛）１

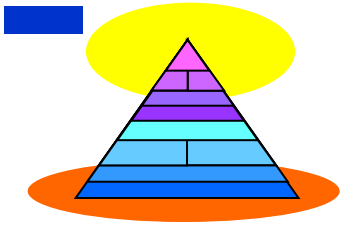


●愛の実力をつくる

種族保存欲求が理性という能力を持った人間において愛となる。
愛こそ、人間の実質的本質であり、人間生命の本質である。
だから、我々は深い愛に感動するのである。
愛を貫き通し実現する事は、生命の本質を実現する事になるからである。
生命の本質を実現するから、我々は、理屈抜きに感動するのである。
愛の世界は、親子の愛を縦軸とし、
男女の愛を横軸として、その骨格が形成されている。
親子の愛における真実の愛は、
生命連関（時間軸）を原理として成り立ち、
愛と信頼の応答関係をその本質としている。
だから、愛するとは信じ抜く事である。
男女の愛における真実の愛は、出会い（空間軸）を原理として発生し、
自我において死に、他我の中に生きる事である。
すなわち、死ねるという心情である。
この死に得る愛に支えられて、
自我（意志）と他我（社会的）使命が一つの意志となり、
一つの目的に向かって愛を注ぐ時、
奇跡が起こり、不可能が可能になり、その目的が達成されるのである。

思風

# ５－２●愛の実力（愛）２



●どうすれば、人間を信じて信じて信じ抜けるのか

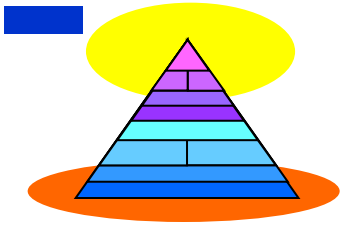
　そのためには、理性と感性の協力が必要です。まず、理性を使って、「人間とは信じられないものだ」と認識する必要があります。理性的に考えれば、人間は不完全な存在であり、それゆえに失敗をしたり、罪を犯したり、ウソを言ったり、騙したり、裏切ったりするものです。
　人間がそういう不完全な存在である事を、まずは理性的に、十分に認識することが大切です。

　そして、そのように認識できた人間はどうなるか?ウソを言われた場合、「それが人間なのだ」と思うのです。騙された場合にも、「それが人間なのだ」という理性的認識が持てるのです。

　人間は決してウソを言いたいのではなく、裏切りたいのでもないのです。人間は、不完全であるが故に、裏切らなければならないような状況に追い込まれてしまい、心ならずも裏切る行為をしてしまう事がありますが、それが、人間の人間たる故の弱さなのです。

　ですから、この事を感性にまで落とし込めば、人間はウソを言いたくて言うのではないのだから、その人間の心を信じよう、という事になるのです。人間が人間を信じるとは、そういう事なのです。
　信じるのは、理性ではなく心です。感性です。

# ５－２●愛の実力（愛）３



●よい人間関係を創る力を、どうしたらつくる事ができるのか

１□人間への深い理解

２□謙虚な理性を持つ

・大切なものは、理性的に考えて得られるものではなく、感じるものである。
・理性の不完全性の証明
・１００年経てば、合理的でない社会になる
・説得の論理から納得の論理へ
・平和の論理とは

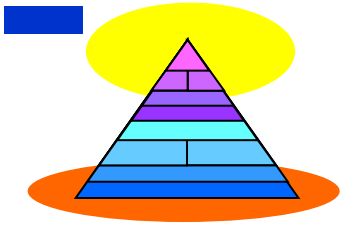
３□人間に完全性を要求してはならない

４□勝つ事よりも力を合わせる事

・競争は悪である
・分裂から統合へ、弱肉強食から適者生存へ
・勝つ事よりも力を合わせる事に、人間としての大きな喜びと価値を感じる感性が必要である

５□ユーモアのセンス

# ６●本物の人間とは何か１



本物の人間の条件である次の３つは、
人間として決して忘れてはならない。
そして、これを目的にして努力する事によって、
人間は、本物の人間としての格を持つことができる。

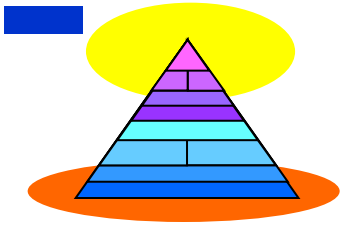
１□不完全性の自覚から滲みでる謙虚さ。
（不完全性の自覚、そこから滲みでる謙虚さ）

２□より以上を目指して生きる。
（イメージ、意志の強さ、限界への挑戦）

３□人の役に立つ存在になる。
（価値の創造、仕事とは価値創造、自分の価値は他人が決める、人に喜んでもらえるような仕事ができる人間になる、職場は道場）

思風

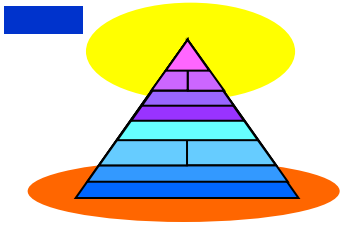
# ６●本物の人間とは何か２



●人間が、永遠に持ち続けなければならない２つの問い

１□「人間で在る」とは、どう在る事か?
２□「人間に成る」とは、どう成る事か?

# ７●人格論１－１



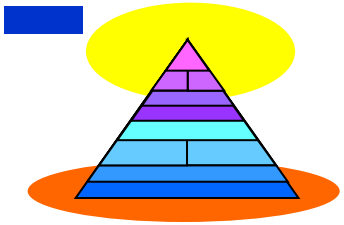
　人間は人格を持って生まれてくるのではない。生まれた時は動物学上の分類における人類にすぎない。人間は生まれた後に努力して人間としての格を獲得して人間に成るのである。

　それでは人格とは何か。人格の柱は理性ではない。頭の良い人間が人格者であるとは限らないからである。

　理性は作為的であり、技術の能力である。人格は技術ではない。人格の柱は、人間の存在論的本質である感性である。人格となった人間性は作為的ではなく、内から自然に現れ出て、感性的に表現されるものである。

　人間における全ての活動は、精神的活動も肉体的活動も感性的活動も、その全てが、感性の中に知らず識らずの内に経験という形で記憶として積み重ねられ、蓄積されて、その総体が人格の実質を自然に形成していくのである。

# ７●人格論１－２



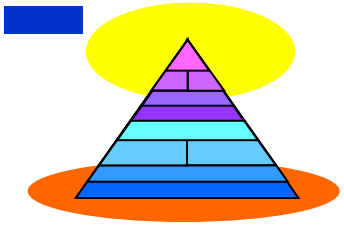
理性はウソをつく事ができるが、感性はウソをつく事ができない。感性の活動は本心であり、正直である。

人格は、理性の技術的働きを手段として、感性の活動を人間的であると思われる方向へ働くように鍛え導く事によって獲得されるのである。それが修業とか、修養と言われる。

だから、「人間に成る」という時、何が人間以前の段階から人間の段階へ変化するかと言えば、それは感性の中に蓄積される感性的実質である。

理性は合理的にしか働く事のできない作用的存在であって、その本質は変化しない。人間の本質である感性が動物的で自然的な段階から人間的なものもへと、その内実と感じ方を変化させるから、人間は人間としての格を獲得して、人格を持った人間と成る事が出来るのである。

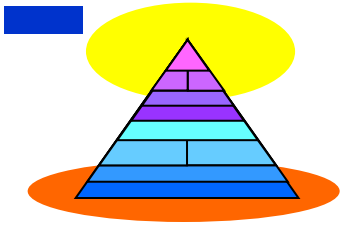
# ７●人格論１－３



　人間教育の理念は、理性の発達ではなく、感性の人間化に置かなければならない。理性的な知識や技術の量だけではなく、理性の思索的活動を通して得られる自覚の質が、感性の感じ方を高め、感性を人間的なものへと成長させるのである。

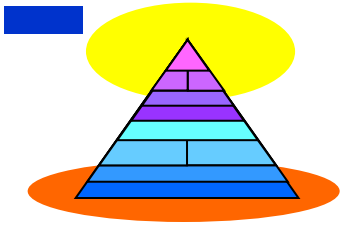
思風

# ７●人格論２



- 人間
  - 感性（気力）
    - 感性的魅力（人間性）
      - 性格的魅力
        - 性格は自然形成的、ムリに変える必要なし。能力や人格を磨くことで個性としての魅力に!
      - 人格的魅力
        - 人格の高低
          - 真・善・美へのより高度で、より厳密な価値への感覚
        - 人格の深浅
          - 意味や価値を感じる厚み
        - 人格の広狭
          - 器、度量、統率力の大きさをつくる
  - 理性（知力）
    - 理性的魅力
      - 職業能力の魅力
      - 人間力の魅力
        - 内的人間力の魅力
          - ●内的人間力５項目<br>気力・知力・体力<br>意志の力、愛の力
        - 外的人間力の魅力
          - ●外的人間力３項目<br>政治力・経済力<br>教育力、文化力
  - 肉体（体力）
    - 肉体的魅力
      - 力が強い
      - 体力がある
      - 健康への習慣

# ７●人格論３



人格的魅力

## 人格の高低

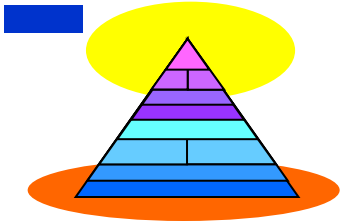
１□高さとは、真・善・美へのより高度でより厳密な価値への感覚である
２□謙虚さ
３□自信
４□志の高さ
　●志の高低　●志の深浅　●志の広狭
５□人間的実践理念の３様態
　●在る・・・いかに在るべきか（現在）
　●為す・・・いかに為すべきか（行動態度）
　●成る・・・いかに成るべきか（未来）

## 人格の深浅

１□人格の深さは、意味や価値を感じる厚みである
２□苦労、悩み、忍耐の質と関係する
３□「逃げない」という人生に対する姿勢は、深さを創るための前提条件
４□暗黒の時代である中世と深さの関係
５□日本においては平安時代に日本人の魂の深さが形成された
６□教育と深さの関係
７□「逃げない」という気持ちを定着させるためにはどうしたらいいか
　●なぜ、一切皆苦と悟るか
　●「人生は苦なり」という悟りの内容
８□七転八倒は絶対幸福境涯である
９□どうしたら問題や悩みを解決して、人格を深めることができるのか
　●本質への問い（本質を見抜く眼力）
　●理念への問い（人を見る目、物を見る目の深さ、物事への深い理解）
　●悩みを乗り越える技術
　　・悩みがなぜ今発生しているのかを理解する
　　・もし他人からこの相談をされたら自分はその人にどうアドバイスするか考え、悩みの中から脱出する
　　・不頼独行、問題解決能力を育てる

## 人格の広狭

# ７●人格論４



人格的魅力

**人格の高低**

１□高さとは、真・善・美へのより高度でより厳密な価値への感覚である
２□謙虚さ　３□自信　　４□志の高さ　５□人間的実践理念の３様態

**人格の深浅**

１□人格の深さは、意味や価値を感じる厚みである
２□苦労、悩み、忍耐の質と関係する
３□「逃げない」という人生に対する姿勢は、深さを創るための前提条件
４□暗黒の時代である中世と深さの関係
５□日本においては平安時代に日本人の魂の深さが形成された
６□教育と深さの関係
７□「逃げない」という気持ちを定着させるためにはどうしたらいいか
８□七転八倒は絶対幸福境涯である
９□どうしたら問題や悩みを解決して、人格を深めることができるのか

**人格の広狭**

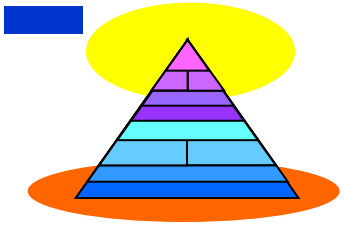
１□器、度量、包容力、統率力の大きさをつくる
２□人間性の豊かさとは
３□人間の大きさをつくるには、対立への新しい解釈が必要
４□感情的対立の乗り越え方
５□大きさをつくる精神原理

●全体への問いを持つ

◆空間的全体性について
（対存在の原理・能力無限可能性・自分を取巻く、より大きな世界と実践的に関わる）

◆時間的全体性について
・現在から未来へという視点（どこまでの未来を意識しているか、どこまで先を読めるか−先見力、未来に掲げる夢と理想の大きさ人間とは死への時間を生きる存在）
・現在から過去という視点（どこまでの過去を意識しながら生きているか、歴史観、生誕という事実をどう読むか）

# ８●境涯論１

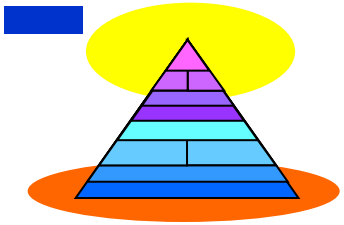


意志と愛の哲学から人格論
そして境涯論へ
小我から大我へ
人称的自我の世界から理念的自我の世界へ

この感性を原理においた根源的統一の論理学の体系が
西洋人をも包摂し、
世界精神として
世界人類の新しい指導原理と成るであろう。

思風

# ８●境涯論２



●境涯論とは何か

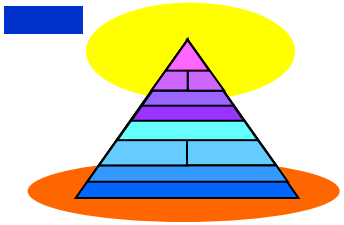
境涯とは、人間の境地のことです。境涯論では、人間の心境、心、人格の水準がどのような段階を経て成長、発展するのか、また、どの程度まで人間性が向上しているのか、を考えていきます。つまり、自らの人格の水準がどの程度の段階なのかを知り、感性の鍛え上げられ方を見る、という事です。

●どうして境涯論が必要なのか

それは、人類は、人類としての人間性が完成の域に達し、人類としての潜在能力が顕現する可能性のある限り、成長し続けるからです。その可能性がある限り、人類は滅びません。

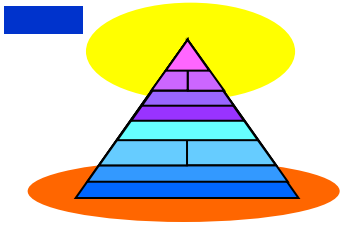
感性論哲学は、感性が人間と生命の本質である、という全く新しい生命観と人間観に立脚した哲学ですから、その立場に立って、感性と人間を理性の支配から開放し、人間性そのものを全く新しく生まれ代わらせ、人格を成長させる事を目的としています。言い換えると、より素晴らしい境地を考える哲学であり、人類史自体が、人間性の進化の歴史であるから境涯論も時代と共に成長しなければならないと考えています。

# ８●境涯論３



| | | |
|---|---|---|
| 境涯論 | | |
| 人格論 | | |
| 成功への階段を登る | よい人間関係を<br>創る実力の修得 | 悪化した人間関係を<br>修復する実力の修得 |
| 実現するべき自己の発見<br>（意志の実現） | 愛の実力の修得<br>（愛の実現） | |
| 人生は「意志」と「愛」のドラマである。<br>私たちは時代を一歩進めるために生まれてきた。 | | |

# ８●境涯論４



## 【境涯論の体系図】

理念的自我（大我）の世界

人称的自我（小我）の世界

第一人称的自我の世界

第二人称的自我の世界

第三人称的自我の世界

超越的自我の世界

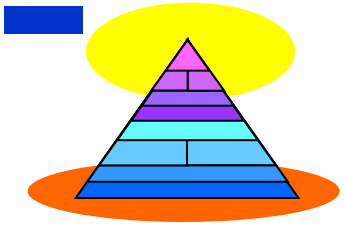
去私的自我の世界

統合的自我の世界

自在的自我の世界

自在的自我の世界

# ９－１●教育論１



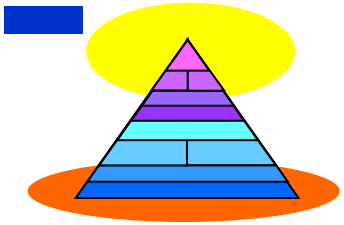
教育の目的は、人間らしい心を持った人間をつくる事。
人間らしい心を持った人間とは、次の３つの条件を満たす人間である。

１□不完全性の自覚から滲みでる謙虚さを持っている。
２□より以上を目指して生きるという人間としての成長意欲を持っている。
３□人の役に立つ事を喜びとする感性を持っている。

教育の方法は、
感性を人間化させるために手段能力として理性を使う事である。
教育の理念は、育てる為に教えるという事である。
教が育を超えてはならない。
人間らしい心を創る最も本質的なものは、
価値を感じる感性である。

思風

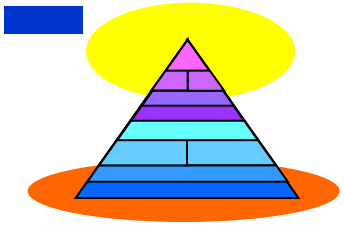
# ９－１●教育論２



## ●教育論の概論１（目次のみ）

１□教育の目的と方法と理念
２□動植物からも学ぶ必要がある
３□教育の領域
４□教える事は教えられる事
５□教育とは「やった一」という感動から味あわせる事
６□知育・徳育・体育という３つの観点から考える
７□人間らしい心を創る最も本質的なものは、価値を感じる感性である。
８□理性という能力を、関心や欲求を呼び覚ますために使って教育する。
９□子供を育てる自信が持てない状況
１０□価値への感覚が、人生とどう関係しているかを教える事
１１□教育力を取り戻す
１２□教が育を超えてはならない
１３□自分がその頃どうであったかという事を思い出しながら教育する
１４□子供は空なる気を吸って育つ
１５□親や教師や教育をする側の生きる姿勢
１６□自分が引き受けて立つ
１７□勝つ事より、もっと大切な事は、力を合わせる事である
１８□対立して自己を主張する事は、無能な理性の証明である
１９□人間性の豊かさとは何か
２０□人間は、本当は誰でも見たがり屋で、聞きたがり屋で、触りたがり屋
２１□いい感じか、悪い感じかという事が、人間的総合判断である
２２□創造力、時流独創の精神を創るには
２３□悔いのない人生とは
２４□生き甲斐と人生の目的は
２５□宇宙の摂理と人生について

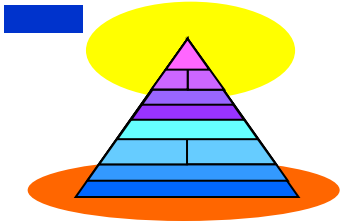
# ９－１●教育論３



## ●年代別教育論（目次のみ）

１□０歳から３歳までの教育について（愛と信頼の応答関係）
２□３歳から６歳（第１反抗期）までの教育について（行動力と自制心）
３□６歳から１０歳までの教育について（善悪正邪の区分）
４□１０歳から１３歳（過渡期）までの教育について
５□１３歳から１５（第２反抗期）
６□１５歳から２０歳までの教育について（自分で自分を教育する）
７□２０歳から３０歳（人生のゴールデンエイジ）までの教育について（個性と独創力）

# ９－２●経営論（時流・独創の精神と経営について）１



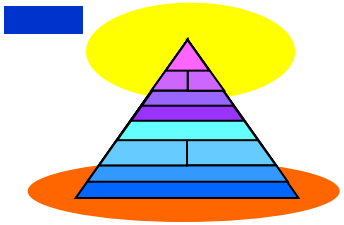
会社は、
全社員が自分の能力が最大限に発揮できる最高の場所だと
言えるような喜びを与えてやらねばならない。
社員１人１人が、
この会社こそまさに自分の能力を最高に発揮できる場所だと
言えるような仕事を経営者は与えてやらねばならない。
自分が最高に活かされる状況を
全社員に創ってやる事が、理想であらねばならない。

会社は全ての人間にとって最大の生き甲斐の原点たるべきである。

職場は、
最高の自己実現の場、
その仕事を通じての自分を完成させていく場、
自分を創り出していく場、自己創造、自己完成、自己実現の
最も素晴らしい場でなければならない。

それが、会社という事になり、初めて会社は本当に活性化される。

# ９－２●経営論（時流・独創の精神と経営について）２



## ●時流独創の精神と経営の体系図

１●独創的技術の確立

２●独創的商品の開発

３●独創的職業領域の発見

４●独創的営業分野の開拓

５●独創的改良改革への提言

６●独創的経営システムの構築

時流独創の経営

↔

↔

時流独創の精神

長所を伸ばす・限界への挑戦

１●自分の心を本当に納得させるものを理屈抜きに追い求める。

２●固定観念・先入観念から自分を解放する

３●自分の使命が何であるかを知る

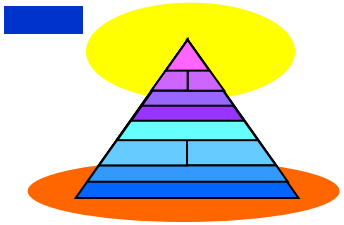
４●命からわき上がってくる欲求・欲望・興味・関心・好奇心を持つ

５●現実への異和感を大切にする

６●有機的統合能力を磨く

脱近代の人間性・生命４０億年の知恵

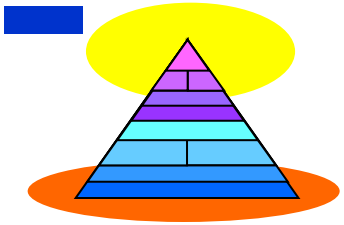
# １０●成功への階段１



成功への階段を登るためにも、
時代は豊かな感性を持ったリーダーを要求している。
感性型リーダーとは、
常に本物の人間を目指し、
次の１０の特徴を持っている。

１□人に教えることが出来るすば抜けた能力、あるいは、
　　人の持っている能力を活かして使う能力がある（活人力）
２□人間的魅力、人望、人格がある
３□勇気ある行動力を持つ
４□先見性に富む
５□情熱を持って夢を語る
６□哲学を持つ
７□人間としての成長意欲を持つ
８□創意工夫の精神がある
９□文化力に富む
１０□包容力に富む

# １０●成功への階段２



５□仕事の意味と価値の確認

４□決断に賭ける・捨てる勇気
後悔はしないという決断

３□限界への挑戦

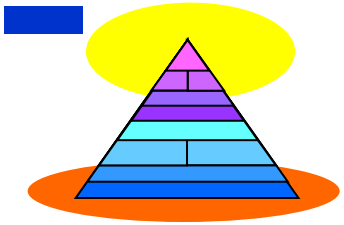
２□自分で自分を教育する

１□信じるに足る自己の確立
１）確実なる知識を増やす（理性を満たす）
２）自分の生き方を支える論理を持つ（感性を満たす）
３）実践的確信の積み重ね（肉体を満たす）

# 「感性論哲学」入門
# 第４部　新しい社会

●第４部は、主体である自己が働きかける客体・対象について明らかにしていきます。つまり、自分以外の人、家族であり、地域社会であり、国家であり、社会全体です。公と言っていいでしょう。

# １１●脱近代化の理念と新しい価値観１



これからの世界に大切なものは
東洋の悟道か、西洋の科学か

これからの人間に大切なものは
東洋の感性か、西洋の理性か

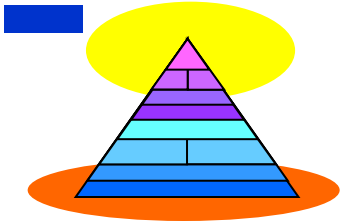
この哲学的選択が人類の未来を決定する。

政党政治から脱政党政治へ、そして合議政治へ
資本主義経済から脱資本主義経済へ、そして人格主義経済へ
民主主義社会から脱民主主義社会へ、そして互敬主義社会へ
理性文明から脱理性文明へ、そして感性文明へ
物質文明から脱物質文明へ、そして精神文明へ

これが現代のスローガンである。

思風

# １１●脱近代化の理念と新しい価値観２



●時代の変化を理解しよう!時代はこう変わっている!
数万年・数千年・数百年単位のトリプルの大変化が進んでいる。

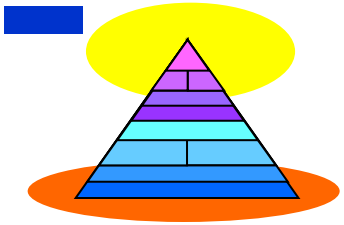
【数千年単位の変化】
■西洋の時代から東洋の時代へ
■文明の対立から世界文明へ
■二元論的人間観から一元的人間観へ

【数百年単位の変化】
■政党政治から脱政党政治へ。そして、合議政治へ。
■資本主義経済から脱資本主義経済へ。そして、人格主義経済へ。
■民主主義から脱民主主義社会へ。そして、互敬主義社会へ。
■理性文明から脱理性文明へ。そして、感性文明へ。
■物質文明から脱物質文明へ。そして、精神文明へ。

【数万年単位の変化】
■地球時代から宇宙時代へ
■縦型社会ら横型社会へ
■弱肉強食から適者生存へ

新しい社会
新しい時代

# １２●脱近代化の人間性１

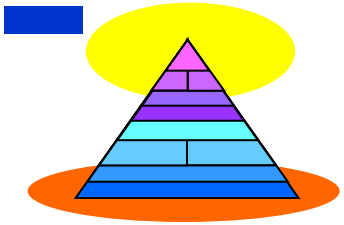


感性は、対立を不快と感じる。
感性は、本質的に和合を望んでいるのである。
対立して自己を主張する事は無能なる理性の証明である。
対立は理性の恥であり、争いは理性の罪である。
理性は、その目的を実現する為の手段なのである。

自由も平等も、善も平和も、愛も幸福も、
みんな理性で考えて解るものではなく、
心に感じるものなのである。
真実は、いつも感性の中にのみ在り、
理性は常に真理という仮象を作り出すのみである。

思風

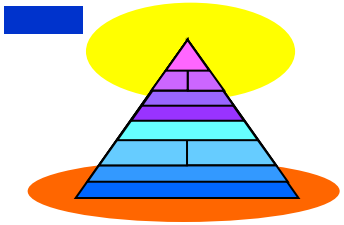
# １２●脱近代化の人間性２



●第１節　理性への批判（目次より）

１□脱近代の人間性の必要性
２□理性への批判（理性信仰からの脱却）
３□理性能力とは合理的にしか考える事の出来ない能力である
４□近代の理性時代は、人類にとって必要なプロセスであった
５□理性が不完全である事の証明
　・空間論的根拠（現状分析）
　・時間論的根拠（歴史的分析）
６□理性以外の能力に意志の力、知恵、愛の力、自然治癒力、
　進化の力がある
７□謙虚な理性を持つ事は、世界平和の原理である
８□理性的、合理的に考えて行く事により発展していく学問は終わった
９□「説得の論理」は対立する
１０□感性論哲学の「納得の理論」とは
１１□「発展的解消の論理」とは

# １２●脱近代化の人間性３



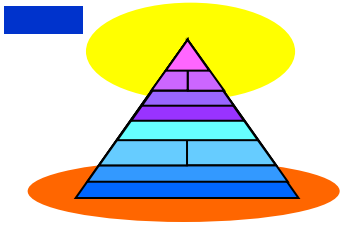
●第２節　理性と感性の関係（目次より）

１□感性から湧いてくる欲求が人生に目的を与え、問題を与えてくれる
２□悩みはあった方がいい、それは何故か?
３□理性は感性によって与えられた問題を解決するための手段能力である。

●第３節　知恵とは何か、どうしたら湧いてくるのか

１□ポイントのまとめ
２□知恵は欲求、興味、関心、悩み、苦しみが湧いてくるルートから
　出てくる。
３□３０歳までの人間には、大宇宙の進化の力が働いている
４□進化は突然変異ではなく、少しの変化の蓄積である
５□遺伝子は生命の知恵の結晶であり、知恵は知力、気力、体力の
　限界に到達しないと出てこない
６□現在の教育改革について

# １２●脱近代化の人間性４



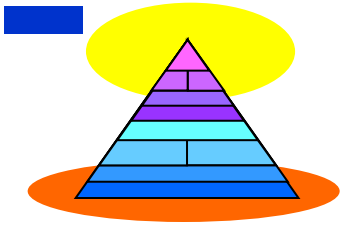
●第４節　勝つ事よりも力を合わせる事（目次より）

１□時代は「弱肉強食から適者生存へ」「競争原理から独創原理へ」
２□縦社会の崩壊で、これからはパートナーシップ

●人間の人生観、生き方の変革

１□理性的な否定的道徳
２□「偏見をなくそう」から
　　「偏見は無くならないが、それを持っている事を強く自覚しよう」へ
３□「物欲を捨てろ」から
　　「物欲を人間的な品格のあるものにしよう」へ
４□感性論哲学と仏教の小我、大我の違い、
　　我を捨てれば人間ではない
５□「短所をなくせ」から
　　「長所を伸ばし、短所を活かす」へ

# １２●脱近代化の人間性５



●知恵とは

１□理性がその能力の限界に到達した時、論理的飛躍として湧いてくる発想、着想である。

２□知恵とは、人間が知力や体力や気力の限界に到達し、それでも何とかしたいと努力を重ねた時に、理性と感性と肉体の協力によって湧いてくる潜在能力の顕現である。

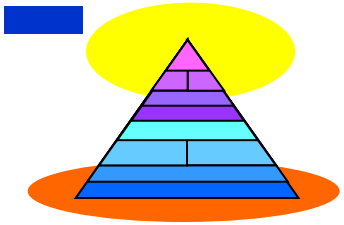
３□知恵は、考え出す力であるが、考えている間は出てこない。理性の抑圧がなくなった時に湧いてくるひらめきである。

４□生命の知恵の結晶が遺伝子であり、遺伝子は突然変異ではなく、少しの変化の連続が、ある一定の蓄積を経て、生命が命の形を変えた時、形成されるものである。

５□知恵は、遺伝子（染色体）から湧いてくる。

６□知恵は、悩みや問題が出てくるルート、欲求が湧いてくるルートから湧いてくるから、欲求が湧いてくる人には知恵が湧きやすい。

# １２●脱近代化の人間性６



■人生観・生き方の変革

１●「偏見を無くそう」という考え方から
「偏見は無くならないし、誰でも持っている」という事を強く自覚して生きることが大切。

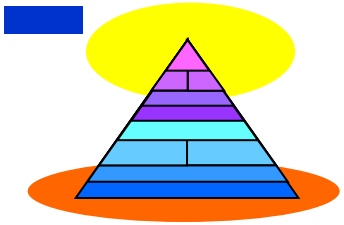
２●「我を捨てよう」という考え方から
「我を捨てれば人間ではない」という考え方へシフトする。
自分の中にある我がある事を自覚し、その我を「小我から大我」へと成長させるようにする。

３●「物欲を捨てよう」という考え方から
「物欲を人間的な品格のあるものにしよう」
「物欲は人間が肉体を持っているから無くならない」という考え方へシフトする。
物欲が歴史や文化を創ってきた。

４●「足る知れ」だけでは真の発展はない。
足るを知りながらも、向上・成長・発展を目指すのが本来の姿。
環境破壊ではなく、環境を守り補修するようなリサイクルシステムを創る必要がある。

５●「短所を無くせ」という考え方から
「短所は無くさず、長所を伸ばし、短所を持っていることは忘れるな」へ。
短所はそんなに簡単に無くならない。

# １３●感性論哲学の興亡の論理１

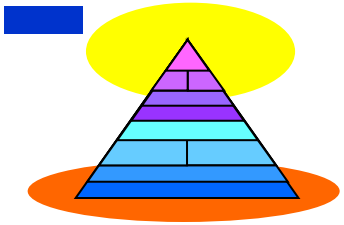


人類の未来にとって最も重要な事は、
１０年先はこう成る、
という人類の意志とは無関係な科学的未来予測ではなく、
１０年先はこうあらねばならない、
と人間の主体的な意志によって決断された
哲学的理念であるはすである。

人間は、科学的未来予測に身を任せ、
それに従って生きるのではなく、
常に、本当はどう在らねばならないのか、
と模索しながら、
哲学的理念に向かって生きるのでなければならない。

思風

# １３●感性論哲学の興亡の論理２



●第１節　日本からやがて中国、そしてインドへと世界の中心が動く（目次より）

１□どうして古代ギリシア人、エジプト人は衰退したか
２□アジア人の潜在能力しか世界の問題を解決できない

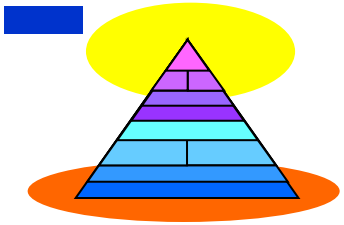
●第２節　感性論哲学の歴史観を支える１０の原則

１□歴史は風土と民族と国家と思想を変えながら進んでいく
２□すべての存在は、存在する事への必然性をもって存在している
３□すべての存在は、存在する事への必然性を実現しきった時、
　完成され、衰退していく
４□一度完成された形式に到達したものは、
　保守化して時代に取り残され、衰退する
５□一度歴史的使命を果たし終え、潜在的能力を出しきったものは、
　２度と歴史の主役に成り得ない
６□人類は人類としての潜在能力を実現しきった時に衰退する
７□世界歴史を動かす力が２つある。それは因果律と自由律である
８□時代を興す原理は、また時代を滅ぼす原理でもある
９□不安を解消し、安心を実現する事を目的に歴史が創られる
１０□時代欲求や時代感情（時代感性）が歴史の方向性を決定する

# 「感性論哲学」入門
# 第５部　日本の使命

●第５部は、私たちが生まれた国、日本の持つ独自の使命について明らかにしています。

# １４●２１世紀、日本の使命１



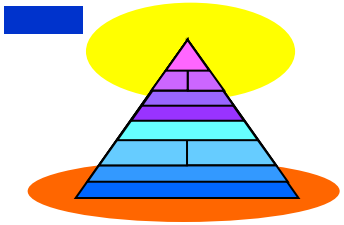
「東洋の逆襲」

西洋中心主義
西洋から東洋への文化の流れが
西洋の停滞を機に大きく変化し、
文化は今、東洋から西洋へと流れ始めた。
いよいよ東洋の逆襲が始まったのである。

そして、２１世紀には、
東洋の中心である日本の時代が到来し、
日本民族は、人類史上第３の過渡期を担う民族として、
次の２つの大事業を行うる

１□近代科学技術文明を、その質において完成させて終わらせる。
２□近代に代わる新しい時代を創る為の原理を創造し、
　　世界に発信する。

# １４●２１世紀、日本の使命２



●第１節　歴史観の確立（目次より）

１□激動を支配する２つの流れ
２□世界文明の中心は、今、東アジアの上にある
３□現在は近代的な価値観と世界観の崩壊の真っ最中

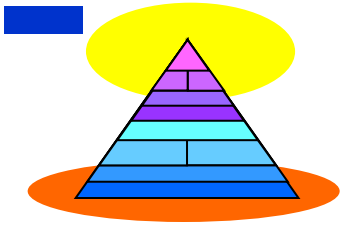
●第２節　第３の過渡期と日本の使命

１□日本人は第３回目の過渡期を担う民族である
２□第１回目の過渡期を担ったギリシア人は何をしたのか
３□第２回目の過渡期を担ったルネッサンス期の人々は何をしたのか
４□第３回目の過渡期を担う日本人の使命

●第３節　２１世紀は日本の時代

１□創造力が企業を活性化させる
２□日本の第３次高度成長は大遷都から始まる

# １４●２１世紀、日本の使命３

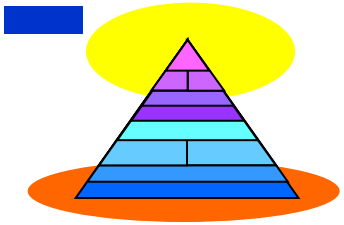


●第３回目の過渡期を担う日本人の使命

１□近代科学技術文明を、その質において終わらせる。
　◆古い時代の原理を、その「質」において完成させる。
　◆新しい時代を呼び起こす為の原理、価値観を創造し、世界に発信する。
　　・物質面からの対策
　　１）環境を破壊しない技術
　　２）環境守る技術
　　３）環境を補修する技術
　　４）環境を創造する技術
　　・砂漠の緑化技術など
　　５）廃棄物ゼロの技術
　　６）全産業の有機的なリサイクルシステムの完成
　　７）原子力の問題、核廃棄物処理技術
　　・精神的な面からの対策・・・生命観の変革

２□近代に代わる新しい時代を創る為の原理を創造する

# １４●２１世紀、日本の使命４



●２１世紀は日本の時代

１□創造力が企業を活性化させる

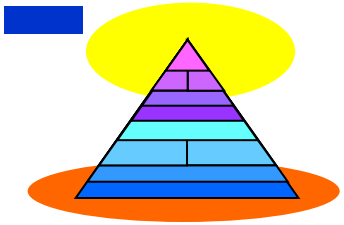
　企業の発展においても、業界のリーダーとなる為には、同業他社が全く気づいていないような新しい価値観を自分たちが発見するか、新たに創り出す事が必要です。これは、新しい魅力や価値観の創造です。同じ業種でも新しい価値観や意味を創り出した会社だけが、次の時代に生き残り続けるのです。

　伝統の上に新しい意味や価値を創り加えていく事が必要です。会社は時代に即した価値観を付け加えられないと衰退していきます。自社だけの気づきが燃えるのです。他社と競争する事にではなく、その新しい価値観、素晴らしさを自ら創造していく事に命を燃やすのです。

　新しい時代に向かって全てのものが価値観を転換していく中で、これからは、通信などの発達により家庭生活、仕事の有り様などが激変していきます。こういう激変の時代にこそ、まさに千載一遇のチャンスが来た、という風に捉える必要があり、全ての職業にチャンスが訪れたと考えられます。全ての職業領域で、全ての製品のデザイン、サービスが変化していくと考えられます。

　こういう大変化、大激動の時代に一番要求されるのが、独創力であります。独創力でしかこの時代には対応できません。

# １４●２１世紀、日本の使命５



●２１世紀は日本の時代

２□日本の第３次高度成長は大遷都から始まる

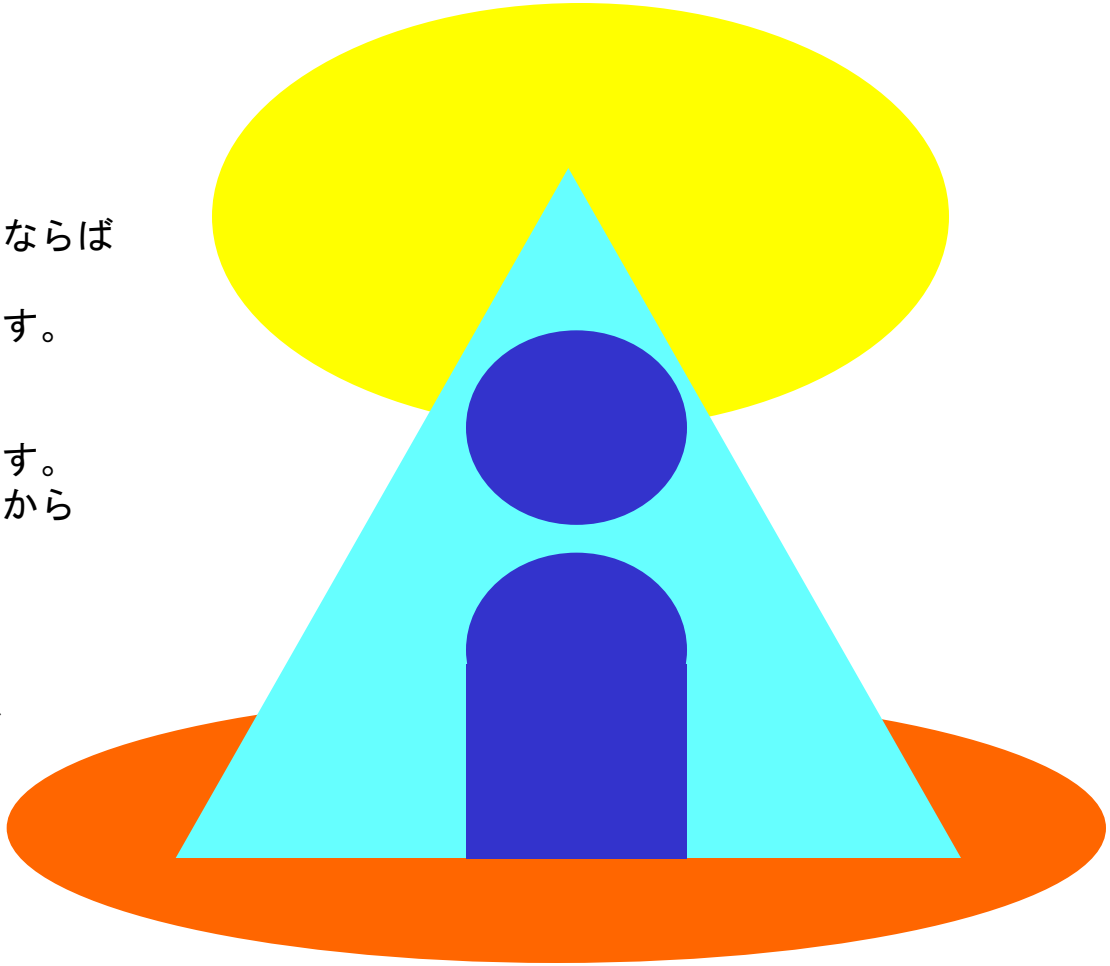
　新しい時代には、必ず遷都が必要なのです。新しい風土に新しい文明を創るのです。世界文明も風土を変えて発展してきました。近代的価値観が崩壊するという事は、近代経済学自体も崩壊してゆくのですから、近代経済学から出てくる発想では、現在世界が抱えている問題は解決できません。
　全く新しい原理を持った経済学を創る必要があります。しかし、今の日本がぶつかっている経済問題は、経済だけでなく、政治、社会も文化も全部が関わって出て来ているのですから、日本政府が経済学だけで問題を解決しようとしている所に現在の政策の浅さがあります。
　歴史的大転換点として問題を取扱う必要があります。時代が大きく代わる時には必ず遷都を考える必要があるのです。

# １５●そして、あなたは何をしますか。

すべては１人から始まります。
１人から２人、２人から３人
そして３人から大勢へと・・・

それが、
本当にみんなが求めているものであるならば
小さな流れが大きな流れとなり、
うねりとなって社会を変えていくのです。

まずは、あなたから。
そして、あなたの第１歩から始まります。
やりたい事、できる事、身の回りの事から
始めましょう。

この「感性論哲学」が
そのための心の支えとなり、
未来拓いていく力としていただければ
本望です。

まずは、その入門ということで
ご縁をありがとうございました。